

酒前茶後錄

七

大正七年六月中浣起筆

特別
14
1919
323



A ledger page with a blue border and 12 vertical columns. The columns are of varying widths, with the first column being the widest. There is a small blue tab on the left edge and a small blue mark near the bottom left corner.

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

38- 9112

為此一旬録

(大正七年六月廿四日)



一底より此本は由緒多し。昔月半ハ此ハ、
余は由緒、由緒後紙に二〇又為ハ心難ク、底紙
一と云七徹熱時去す。門を出てさる既ハ十位
日、此ハ酒と煙と多くと純文、**車馬事**、**幸**、
湖軍、**勅**、**奉**、**映**、**筆**、**事**の病株と記すハもの多し、僅
うに無聊と免る。

物者名物数本を添し、此本一百巻で成、此本
幅二寸二分、堅三寸二分、七行異紙、余の理想とす、
中箱本より、此内十冊薄葉本也

底面此本に藤字を姓あり、故らうして七巻、藤字成

ふ、寫す所の者曰く、頼山陽唐純新選、三冊曰く、
日春琴論書詩正續六十律、曰く、端溪硯石志、
曰く、陽羨茗壺系、曰く、美人譜、曰く、花鳥春秋、
花月令、曰く、酒政觴令等、多く、檀几譜、古よ
リ、膝方する者、防十器、と傳ふ、假り、書名を以て
一、粒珠録と云ふ

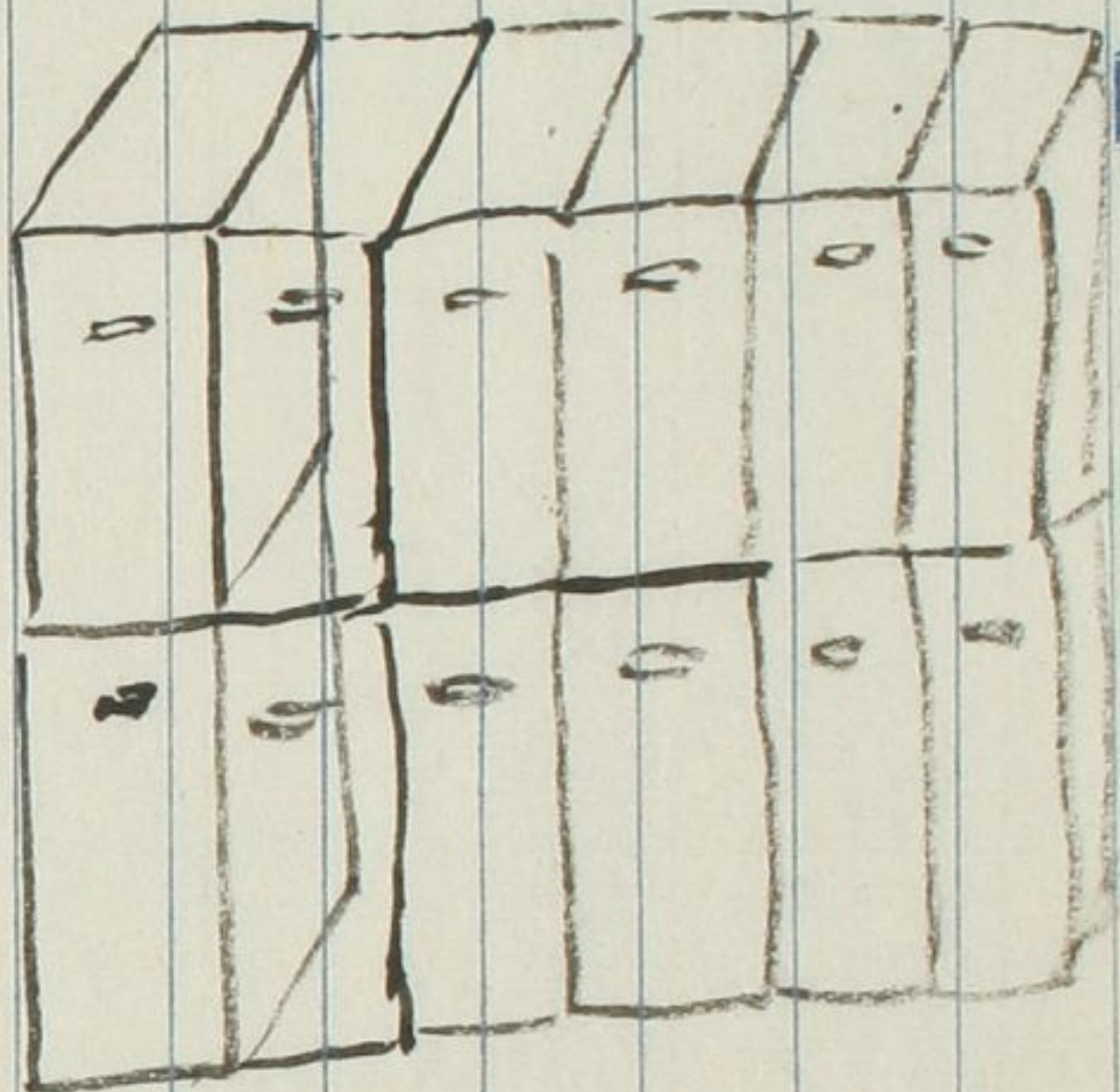
余寸珍版本、此種の書を得んと欲す、尋常の
書房に於て、其淵を納めんと擬す、其の書名、
煙烟の當戒を守らん、と云ふ、執筆者、と事とする
尤七の也、此の煙烟本、皆、換烟録也、十数
の爲中、箱蓋、職、ち、得、ん、と、云、ふ、此、の、中、若、手、本、也
と云

病問外、出り、回考を過す、然るも、僅に、一書、
より、若干の中、相本を、供給し、夫、書、高、船、衣
本、外、廿、八、字、詩、(、箱、版、冊、)、薄、葉、本、俗、曲、集、等、五、六
種、皆、珍、る、も、も、無、き、に、優、る

此間中箱本と収めるの書匣を作ると欲し、構思
一日、圖を、心、を、試、み、二、個、を、作、ら、し、一、匣、約、四、十、冊
を、納め、形、状、意、に、違、ふ、即、ち、更、ら、二、十、二、個、を、心、し、
一、匣、を、未、だ、に、成、る、を、待、入、也、と、云、ふ、
類、を、分つて、粗、を、精、と、採、り、取、り、之、を、書、箱、に、置、ふ、之、を
め、一、板、敷、を、か、ん、敷

此、十、四、匣、宜、し、く、左、の、如、く、置、ふ、べ、し

現在菟集の本十四函、納の
得べし唯以豆本の二類ハ
別に納ある一函無可らず
是れ末に二夫を恒ず



新潟客舎に病後假寐すのを骨しと授筆録せし免
けし衛口發病を内河前より移る所支と登載と始
め相成後之れを潤す是れ内河の一行事也
新潟に帰省前裝潢を托しなる小波山人の戯書三

幅松も昔成る病後と揚けて親しむ是れ小波
うま年菟集の馬の玩具、版を建築せんを
資を同人と募り謝禮を以て送り来りたるもの
畫を以て巧るる事ありは味あり
一書在舟圖書を折る来り見す市箱本時
を取ると是る事一唯以印漢二種収花位
す者あり揚めて病後を慰するの具とる事
一高芙蓉摹寫古公私印説一書名を測く
卷首揚守敬の序あり日多く漢印を収む
冊数二

山田清也を助けて前月来努力せし新編書複製表

病中多く茶室に居る人未だハハハ延く庭園の眺
めを遠く陰翳●をうらみ所あつし但し閑静にて
為す所よりさへ此室に限る

去月末も一筆経過してとうとう春の四火災より再び
係争に加入せしむるべく促し来り、此以保
険率著しく昂騰、氣乗りせざるに、飢りさう
ふさぐ要ありしころ、●前回の家賃五千由
物名三千四計八千四と一加入せしか今が
いは葉家賃を二千四とえ納り総計を葉名
と一加入す此の料は三千十一四の計也
閑中私を悩ますも何れもさへさるるもの上

叙のこころし而して繁復あり即ち昨夜の問題も
学校の問題も交を一年を経過し春景物に先
ちいひて春景も決てぬハハハとる。流海
中世而元の輔佐役として輔施しつとある。此の
隔り位に春物もまゝ任じておるさうな方
の重要ありい唯是れ耳

今年油畫に没頭し乍ら所謂改正校視の漸やく
垂り居る維持費金を通して其成文ハ枕頭
回付し来り、枕頭寄りさうも海もさうい、唯は
四十名の維持費を敷き金とて是れさうして
二十名に減し、教授金の増果も知れしと
教授金もさうして選るる人と許御費金もさうして之

なりて七名の口作れを遂にせしむることき一様
夏迄の選り方と作りたることと北制法の苦心の取
り所、ガクノの事なる法に多きを望むべき
ありき也

其の内は峰見痛切に泣きまじりて、今大隈侯を
化すべしと傍ら校のうらみ及ぶ侯ハ天の延き
分校の要部に入て中制法を力く憤慨し
吾氣甚旺也。法令をんく流儀がたき
彼人の復讐を想ふことありし侯ハ到底首肯
せざりし

城を對り流儀の中とせんを傳へる事
又と疏通し遂におゑ大隈侯にせん天の

想をこころを流儀の侯断然之れを許すと、此の
事り報りし所也

余の方の語る所とすまき思へる候は名氣
ありて旺るも流儀をこおして挫折をえり
無えんを而して此の詳せん語る所と據ん
ハ侯ハ一歩も屈する所なく、終に流儀等と
て并持すの事ありし後をいふ事ありし由
無き事ありしと

○侯は方の語る所とすまき思へる候は名氣
ありて旺るも流儀をこおして挫折をえり
無えんを而して此の詳せん語る所と據ん
ハ侯ハ一歩も屈する所なく、終に流儀等と
て并持すの事ありし後をいふ事ありし由
無き事ありしと

痛切な事々怪あふは、漸くその人ハ侯ハ
海軍中野あるえ、今もその為を立んとす
ル高リ夫人ハ切々天也と稱し、怒す所の事
と云ふと、侯ハ夫人の助言を以て其の政治的
痛癢を抑ふべくもあらず、侯は量あると云ふ怒
ふべき時に怒るも、怒す所を以て怒せば、侯ハ好
ム所ハ人耳ハ、病問、胸懐を聞き、その事
一新聞也也、
大政侯の暗進、觸ル事後、幹部主力を以
て、油傳的園田一快性を生かす、而も、藤澤
等ハ尚ほ此案を拖り、其の事と代える
を、侯ハ後、御心、其の事と達せんことを

元、或る日、但し卒業式、侯ハ校長、大倉澤、
其の時、區つて十日以内、在り、その間、解決
を、見せ、其の幹部、此等の事、臨むと、事
々、一、懊悩甚し

病後外出の難力、元、其の事、新、
其の事、持来、新本若干を取、其の事、見
る中、**磯石**四冊、宣統巳酉二月、長洲、葉
昌熾、著、其の事、所の著、其の事、金、名、ハ、其の事、隨
筆也、其の事、近世、発見、其の事、金、名、其の事、其の事、
其の事、録し、金、名、其の事、其の事、其の事、便利
其の事、其の事、其の事、

他、西、冷、印、社、の、梓、行、其の事、其の事、吳、氏、聚、珍、版、骨

「董十三説」玉化二冊宋版式活字を以つて魯紋版に
印刷し以る者、流石に支那の執味家の工風、斯界の標
本と云ふ事足る、日本に於て是を以て「宋版式
の活字を作らばある哉」

文中の「横政者」印語を辨め、是れ近年
上海に於て上梓のある原本の面目無しと雖も亦
先考と誤するもの多し、余前年、元終を三帙
と後後之れを二つに分る金を押つて完本
を辨め、其の多し、此五枚本傳を二つ、同
甚し、日本に於て之れを以て「小切く」産る事
能はざる也



ふん
高橋村の福後氏

高橋村の北印を考ふる且つて北印高久
露光の自伝の記述に流石の口許あり
去るに臨み、其人の述べてある者二點あり
是れその一なり、無款の書不きと云ふ
其後の出初、南の終に於て「西き」云ふ部を
聯名者名に記す、此に臨み、其を以て「格
別の者無り」と云ふ、是れを以て「思ひ」云

等との花干を獲たり、落葉十不五種は落葉を
喚るる家徳の士所傳七部集 畫業家時壽の如
き、こゝに披きあしつゝある也

中葉半の漸く核とて二る花とるる前日迄は一五
分者画十四個成ふ類と今つて納ありゆ礼のよ
初めを整理を待て六方より一様なり也

病後の散策、文市巻を眺め傳へ内田魯庵
存、此に請ふる郎永寧の画幅を一説す、
えと幅一河望二河あり巨幅は花鳥と太
湖石の精細に日描りえ極彩もこの施さん
且つ幅而に煤氣をいひかへるる言ふに三
派なるものあり、即ち寧、伊太利人の支那

この物化した人である、言ひまもはるる、西風は洋
風を花卉はとこもも七言書かすまことと
念心の位にある、太湖石の痕、徳とまふ人の
補のりと落款と見え居る、支那性年
の乱にふりて物を日本に来た者である
文市巻の支那へ行つて物物つたものとい
無い、老翁の由り内田をさるるをさるる
氣味を吐て居り也 (病外秘考)

○四葉の前の場所の時の研究分と大隈邸に
一に落しは未だ四つと物類に姉崎博士の尺子
語をさし、以後十数枚の軍中に因する傳入
の度、いづれを失ふるにあらざらん、前年某

四三萬りし来に四枚のものを海にえれば自分の
 眼ももたかみ政々しく感しるうらなみ米を
 つまみ主國文にも致のじうは防人民側む此の
 二倍の(勿論國も)関係しん振るす(けこ)こんり
 英つとそを所ふおもしういふもあま今一ウは
 去す(ま)に北等のじうのちさうく印刷しん
 筆此のきう紙端に入らあまか、そんをさるも
 く、猶もその印刷所をさる印刷人であら米
 國むも猶も石版書をさるもさるものさる
 いとさあまあま(さる)猶も印刷所をさるもの
 猶もさる又さる後書を印刷してさるもの
 一程の皮肉であらうとあうしく感せうんは、じう

Wasteful
 Spending
 Helps the Kaiser

Save & invest
 war Saving
 Stamps

の政向を自分、のさるものさるもの比較すると
 ぬもさうあま換へ感せうんは、さるものさるもの
 米玉のぬきのケレキ、裁舞を要せぬ、さるもの
 七あまうらびあまうらび、十郵枚の内半を
 思つたもの、貯金の勧誘のじうに、
 無益の浪費の力、
 と助くるあま
 とあまのさるものさるもの
 じうに
 すんじうにさるもの
 Hum とさるものさるもの
 ハ、さるものさるものさるもの

猶市に^{東洋}を評し其傳をその條に元りする
ハ舊の語とらうしてそのちいひぬちういひぬ
○天竺も昔城の復歸せしめんとする仲裁法し大隈侯
の納す所とらうか油傳者若岡のころ前記し
たりぬし、物るに後ハ油傳の更なる手とく今
因ハ臨洋中望を以うして校友の先如平正六相傳を
侯ハ世系に及ひぬんば侯ハ直なる許せしむるも
唯此評し得る跋えとらうとぬハとの評を洩らぬ
六其の~~事~~はゆつ天竺を信心する傳人の海流
るなるとせんハ評しうらうと云ぬんば脚く
リらうとらうして油傳者に喜ぶぬんば侯の真意
何んをたりや言ハ判しうらうし高田侯の真意を

いんと影しぬ此子のあつた聖朝侯を信心し
所侯ハ向く言ハ出来まのお傳をうけ
リと云ぬんば高田評し高田名を信心し
く出来まの上系中一助ハ侯を和けんと
て他の校友侯ハ名を信心しぬんば
陳集す所ありしハ侯ハ不ぬありし
多言なりし何事の挨拶をせしぬんば
不ぬんば上系中一助と云ふ侯の天竺に
おつた喜傳以つて喜傳なりし
評す所今に今に合念する辭けをうし
二合念する愛するなりし一日高田侯と
して不集を信しぬんば高田侯と今の外に

(徳政) 田中唯政本(不巻) 今合従来り候ことを候
 海公の上、おふ徳高此何こふも也とそふに就き、大
 体調停有る候し其面目を立つるらん天竺謝死
 するに下じちまふ候に託いこと、せん、但し天竺
 八侯の赦免を得る上、維持費なることを又つら
 う辭退さし、乃ち辭退するに意を認中事、
 平和の平和の果あるに、不奉意する候
 こらにの添はをあらふし、せらるる以上、以しん
 候に謝死の元次と有る事、又天竺を維持費
 二後悔し其位、つらふことあるに、こらふを絶ら
 及對ふしとあらふ、一ぬ、後、天竺
 、候を寛い、行き、候、兼、山、英、大、の

海よりとそふを、天竺の、徳の、若林、又、何
 の、候、と、思、く、冷、候、も、進、方、を、自、分
 の、後、悔、も、此、を、言、ふ、言、ひ、つ、る、が、い、ど
 こ、ま、し、一、若、林、に、弄、す、ん、終、に、亡、ふ、を、候、と、さ、る
 こと、の、氣、の、ま、あ、さ、三、浦、や、石、橋、を、決、し、て、若、林、に、因
 り、曲、り、ま、し、に、言、候、と、和、せ、し、め、ん、と、の、意、向、ま、し、
 ら、先、天、竺、に、物、立、の、意、見、を、あ、ら、せ、り、
 した、ん、つ、あ、る、こ、と、を、ん、に、油、傳、有、い、ま、ま、り、
 國、境、に、歸、り、つ、い、あ、る、也

其、田、方、に、於、て、内、証、を、了、り、し、る、既、に、日、西
 山、に、候、ん、と、ま、り、其、田、の、先、進、す、る、自、天、竺
 に、赴、ち、ま、り、こ、こ、に、晚、夜、を、せ、り、し、て、い、ろ、く

み思つたところ、挨拶に躊躇し、しばらく、そのこと、以て済ん
た、故に浦邊へ、さうハルビシ、出、うけて来た、いと、誇り、
露人の日本人を畏れ、さう、さう、と、浴衣、徳の自、人の乗
つて居る汽車、さう、と、露人の軍人も、避けて、回、乗、せ、さ
り、し、さ、何、の、如、く、錦、城、一、流、の、大、言、を、吐、く、余、も、負
け、て、さ、さ、さ、探、偵、君、さ、探、偵、と、認、め、ら、ん、さ、う、し、を
幸、し、あ、つ、た、さ、さ、さ、**十、果、も、**、さ、の、て、**天、の、**、**一、以、**、**雷、車、**
湯、本、と、着、す、と、同、的、と、電、話、の、通、信、さ、さ、さ、の、甲、車、又、あ、つ、た
自、動、車、ハ、返、早、く、余、等、を、迎、つ、**其、雷、車、**、**の、傍**
ま、ま、来、り、以、ん、ハ、直、ち、さ、さ、さ、に、乗、り、移、つ、茶、店、と、越、し、雨、倒
ち、さ、さ、**錦、城、**、**と、別、を、さ、さ、さ、の、暇、も、さ、さ、さ、**、**甲、車、**、**の、**、**激**
々の聲、と、さ、さ、さ、早、く、山、上、へ、向、つ、て、さ、さ、さ、**一、以、**、**十、時、午**

後二時、お根の新道へ自動車、すん、お、丈、の、幅、あ、い、と
羊、蹄、の、屈、折、ま、ま、き、為、め、山、上、へ、さ、さ、さ、の、自、動、車、下、つ、余
す、ん、ハ、山、の、さ、さ、さ、の、如、く、の、趣、に、**あ、つ、た、**、**衝、突、の、**、**雲、さ、さ、さ、**
あ、つ、た、**殊、の、**、**峻、坂、を、下、つ、**、**自、動、車、**、**の、**、**お、お、**、**戒、を、**、**要、す、**
操、縦、者、の、注、意、を、さ、さ、さ、**怪、我、ハ、**、**減、多、る、あ、つ、た、**、**さ、さ、**、**唯、**、**以、**、**察**
さ、さ、**が、**、**先、も、さ、さ、**、**と、**、**雨、も、さ、さ、**、**急、に、**、**強、く、**、**速、力、を、**、**お**
早、め、**怪、我、**、**の、**、**あ、つ、た、**、**さ、さ、**、**此、の、**、**幸、さ、さ、**、**上、**
り、**自、動、車、**、**三、**、**軸、の、**、**さ、さ、**、**か、故、に、**、**一、**、**車、**、**の、**
腹、目、を、さ、さ、**も、及、つ、た、**、**車、**、**進、進、境、の、**、**深、を、**、**さ、さ、**
の、下、を、さ、さ、**向、配、の、**、**急、さ、さ、**、**峻、坂、を、**、**お、さ、さ、**
約、四、十、五、分、間、さ、さ、**湯、谷、三、**、**河、屋、**、**旅、館、の、**、**前、に、**、**着、**

とを得ずし、近年山下の諸湯往々水害の憂あり且つ
繁華に赴くは連年の凡儀漸やく乱れ上流の人
衆之を厭ふより此地に遊ぶ者年々を逐て漸く
多きをみゆる倍徒すとの傾向あり

三河谷ハ先年谷田の邊の勢的の涌せし後ありしに
谷田の雪崩を以て今その況を以てありしに
二部谷の用事も油いそり若くは便宜を完えしに
し流路ハさつと大規模を以て改修せしむるに
し方谷の地に任置せしむるに於て七爪谷
ありと定むるを思ひの外振りが、
さつと改修せしむるに於て、
ことごとくあり、水櫃の上を以て改修せしむるに
試む

三河(前)

近年後の地味も、
地をこききたる時、千條の流を以てし、
の北地に於て知る所、
ハ先づ此の流を以て訪あるあり、
感あり、
近園地の今、
方谷の地、
此に於て、
ふ途中、
清涼人を以て、
を以て、
業の地形を以て、

まきつらと俗客を驚く足る大に肉魚がいさううい死
いお根と世にいとみほ嶽も其方なりあかしらうけりとい
よみほ嶽此のふ湯谷を斥しなううて函嶽の極其方
を凌りて事なりえんといふい善ししり宮さう然れども
ふ湯谷の風早葉のむも賞さへきいこんこあうがし
他もあうん余の極雪烟の麦細印事す
化をうつて此の地の絶跡と為れんと欲すすまのう
雲烟い大嶽深山の特産物さう北のよのあううあう山い流
こん無けんか山い死物いさうしと云えん印嶽山い居然動
うの四季具の事表皮い変化をえんうえん
（よし官の事い） 雲烟山谷を起つをうつて山容
巖姿麦細印事すまのう 化を生す或い雲烟山

頂を越つて腰部以上人の目新を許さうういあうの或
い雲烟い山即い湯谷い銀海い吃まうう鳴嶽の政を
めりよあうい白雪あ山の間い相連うう山嶽
を越嶽すいの事いしあまの杖をさううあうい
うういい忘尺の山をさういい俟ううい現いる或
い鐘梅るんいのこといい並立い山時を飾るあう
或い大鞠穂の如く大固をさうい山嶽い極い懸
うあうい或い烽火の奉うこといいむらうい上
り山い高さをと事いいあうい教固の白雪浮動
いて互い相觸い推嶽いあうい山い北寺空
烟の生産場うい六舞甚い麦わ不思議の
め技を演やいあるい大背早京るえんい山

ハ不動の大塊なるも、雲の如く動く者も見え
ん。甲斐其鼓屋と集化す。雲の如く動く者も
見えぬ。初りこの如き。奥出没変の如く、
あを濁す。いふも、深山の絶頂ハ、えを才一推
上深山中の特種なる。深山の絶頂ハ、えを才一推
この如く神祕的幽玄の味ハ、えを才一推
今次此地に、来り、浄在、僅二日、いまだ、重
化を多く、えを才一推、其標を、
を見たり。浄在、前日、及び、一日、雲の如く、
を得、いふ、去年、地、造、北地、
一、二、三、の、
き、
十二

所あり、吃れ、
樹村を、
す、

北地、
三井、
大土、
の、
投、
リ、
後、

傳の、破命某、某の某の別荘を懸説し、樂燒
を為す家をさして庭中、多々く高山植木を多く
置つ、い、シヤクナギ、樹海太比彦をすべし、余
既賞之れをえのり出入出、すなり、余聞、此地
を別荘在地の地價を聞か、人の多かり、最早、此
地、ある、所、多、許、あり、ま、此、地、價、大、い、昂
り、固、民、の、こ、と、ま、じ、多、り、の、場、不、い、ほ、七、の、善、者、の、
傍、あ、り、ま、五、田、を、下、り、か、り、今、い、土、地、の、所、有、る、價、の、更
こ、り、昂、らん、こ、と、を、期、し、ま、る、こ、と、を、疑、す、と、山、中、の、
田、家、多、七、家、多、り、也、
滞、在、二、日、の、午、夜、加、の、就、を、儂、め、て、強、盜、を、誘、ん、と、思、
え、つ、強、盜、々、小、湯、谷、を、距、つ、僅、う、ん、十、三、四、所、徒、歩、え、

行くも難く、ある、ある、ある、余、山、を、た、り、乘、り、昔、
の、旅、を、憶、ふ、の、味、ハ、ん、こ、と、を、祈、し、お、持、に、駕、民
を、儂、め、て、行、く、強、盜、々、若、根、本、道、より、側、へ、入、り、此、地、
少、海、原、電、鐵、に、行、き、ま、ん、な、る、新、お、湯、谷、地、う、こ、地、の
現、い、宮、城、の、荒、々、い、木、竹、々、々、し、つ、を、元、也、し、し、
小、湯、谷、より、す、り、入、り、寧、ろ、う、遠、く、道、路、も、ま、だ、悪、し、
但、し、電、車、の、設、計、ま、ん、つ、も、小、湯、谷、今、う、一、直、線、
く、り、の、設、計、ま、ん、も、興、夫、の、就、き、な、る、捷、路、ハ、舊、道、
ま、り、も、一、段、の、悪、路、つ、り、徒、歩、し、ま、を、心、に、を、り、し、
こ、と、を、ま、ん、に、び、た、る、程、ま、り、初、の、旅、合、者、を、あ、が、す、時、ハ、
十、三、四、所、の、家、を、姓、後、ま、り、一、時、何、と、あ、り、し、ま、ば、
完、分、る、ま、り、し、何、ん、か、同、い、姓、路、に、格、を、ま、ん、と、一

時を考へしう悉く想ひし、道路のありまこと也
あまのこ出てしうの、物おほき地、入るふあまの感
しうの法構のさうしうにおもはるる
くお根山、このある平と思ひし、こころう園、今
もお根山、前山、田原、電線、こころ、電車、とも見え
先の住をしうの、こころ、其の所、大の土地
も、價をせし、人、おほき、也、園、和風、園
と洋風、園の二つあり、園、大小、陽、異る所、於て
さう、趣向を異る、而して、自分の、風味、投し、此
と、和風、園とする、此、を、噴火、作用、と、丘、大の、巨石
亂立、し、年を、経て、苔、蓋し、雑、材、其、詞、毎、年、も、す
所、の、さう、和風、園、乃、ち、此の、舞、む、優、なる、地區、を

選擇し、自然の、高、低、と、散、乱、する、巨石、を、其、体、に、作、庭
の、礎、と、し、巧み、な、道、を、築、つ、き、お、造、堂、物、を、點、綴、し、
こころ、も、幽、寂、の、味、掬、す、へし、園、内、に、茶、室、あり、
又、十、数、の、家、屋、あり、皆、を、構、造、清、洒、を、極、め、
人、の、需、め、に、應、じ、候、体、と、す、と、その、所、謂、の、依、別、在、る
る、もの、也、自然、幽、寂、の、境、陰、鬱、の、場、る、ま、る、あ、ら、ん
ど、文、雅、を、ま、な、こ、ぶ、もの、激、賞、を、極、め、す、餘、を、
似、る、株、式、合、社、の、も、も、天然、を、損、せ、ず、此、の、好、個、の
庭、園、を、必、ず、考、を、穿、ち、る、思、儀、に、感、し、低、曲、を、有、る、然、
や、う、し、洋風、園、ハ、一、層、視、模、大、キ、く、多、の、巨、石、の
夙、致、を、為、す、もの、あり、と、思、ふ、こころ、ハ、陽、氣、の、天地
も、さ、あ、ら、ん、景、景、の、人、ガ、ハイ、カ、ウ、に、華、院、の、庭、を、

作りぬると同様の致あり、とりて西洋の花弁を植え
洋館を添付し水泳場、毬戯場を設くる等飽くまで洋
風に倣ふは浴室を喜ばしむる又外人を引くこと意を
用ひたり、但し何人の設計にせざるか和風をとりて
箱根山中、何れ七期せざる上乗の造園するところを
七一巻を要せしむる

之を山田宗岳(二印)箱根、遊ぶ久しく終、強羅に遊ひ長文
を心のこもる勝を稱ふ其文一時同人間に讀まれば、宣傳
し余も一讀せしむるに其の内容をよき事忘れしこと此
事二十年前(一印)今日想ひに當時強羅に遊ぶに好
事な所にあらずんば、能くせざるに計りたること、當時
旅舎設備の設備の不完全、中筆に記し、その事、宗岳

何れの中を此地を稱せしむる埋没する山中、惜しむべき風景
あり人の多く訪るる所に刊り埋没する風景を擧げ得る
こと、故に特に紹介を試みざる者、今九原より起して
其委曲を聞くと、由緒多きを、能くせざることを、奈何見
るんか、角、宗岳没して、其年、後、強羅に果
して長く埋没する事、去らんや、十田原電鐵の着
目する所とする地を中心として、お覽電車を建設
けんとして、山、稀あり、造園経費を云々
を見んか、宗岳七発見のゆゑありと云ふを得ん、
宗岳の想はく、地下に微笑を洩らし居るるん、余
の函嶺をたぶらば、幾回、お勝取の地板を討探をせ
り、而して強羅、堀、山、軍、強羅を知らざる、今次

(二友)
様計を敢てしつと二十年前の母初めに従ふる。此地に淑
心特に二友を偲ぶの情切し。其の情切し。其の情切し。
切るるを感す

迄羅お困用けて以来、西原電鐵不況の地を購ふに別荘
を營む者漸やく多し。現に帰途車中に見る所の別
荘のみならず、其れを数か而して岩崎家の別荘も其内に
在り。頗るお趣遠電鐵開通の目眩、更に一層こゝ
に別荘を営む者續出せん歟。此地は行き止まりの
事とて今日の處、自食料其他日用品の供給を得る
甚に不便なり。此等の不便を電鐵開通とせし除く
を得ん、而して此の趣遠電車の二事、今漸やく進
み、迄羅の終止も停車場を置くの礎を既に置

んあるを認めたり、又山を辟き、爆薬の響き轟然と
る聲の轟く耳を刺すを驚かす。此二事の進捗を
報する者あり、~~迄羅~~開通の速きこと、~~迄羅~~期
をんゆきまある歟

今次の登山は、梅雨の候に属し、雨頻りに降る涼冷の氣
中、~~迄羅~~不況谷に滞在。二日の渡り、その衣服を脱ぎ
能ひ、~~迄羅~~程々、實に未だ早過ぎたり。
漫州未だ~~迄羅~~去る由吾も、浮雲の如く匆卒三日
目に此地を去る再おを期すところ、大正七年七月六日
鳳来橋に~~迄羅~~於て此の記をを作す



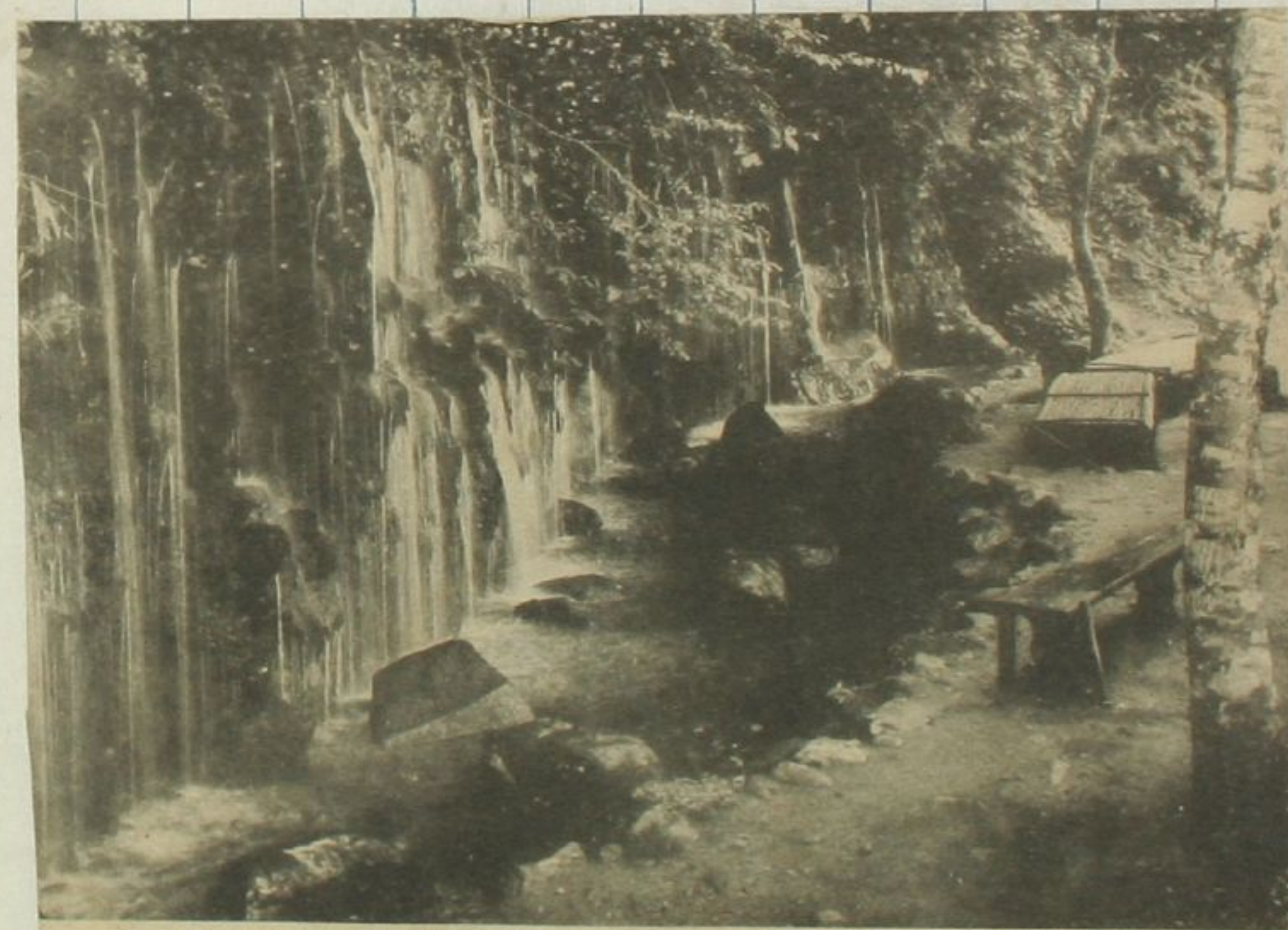
Mikawayama hotel Kowakidani. Hakone. ルテホ屋河三 泉温谷涌小根箱



Cherry Of Kowakidani At Hakone. 櫻ノ谷涌小根箱



Park Gora at Hakone. 園公羅強 根箱



The Water-fall Chisuji, Hakone. 瀧ノ條千 所名根箱

○寸珍本の^の苧草集：着年不明、三ヶ月に成る、角七二行以上、入つた、逸んがまゝのし、ある極比係しとあると思ふ、宛のまゝの一向年入らぬ、此の苧草集のしきもある氣付いたこととある

一 ちがひあるものと、較ぶるが、幾んど年入らぬ

一 その次の豆本の類で、この中、まことに、あつた、醫者ハ扱へば、及、中、の、堅い、

一 佛書ハ、物、の、度、の、い、氣、味、ある、

一 苧草集の氣味、ある、もの、支、中、の、試、休、の、本

一 その次の支那の脚本、近年出来たもの、

一 一番類の多いもの、詩集

一 一番氣味の利き体裁のよゝもの、柳橋、

一 此の寸珍本の類、心、改、心、ある、林、田、月、全、

一 晩唐の選の類、心、えん、扱、つ、本、と、す、

一 寸珍本に出来て居る本ハ、極めて、日、流、布、

一 の、度、の、い、本、云、の、有、觸、ん、た、本、と、一、時、裁、

一 九、心、の、比、を、と、の、二、種、：、別、ん、と、長、く、即、ち、

一 方、極、端、に、度、を、流、布、の、性、質、を、考、へ、る、と、

一 と、日、本、の、流、布、と、さ、え、と、流、布、と、い、ふ、と、

拘すん中一飛行機飛行船を操縦するに
 うなむの習ありてを著しく進めし時致
 ハ多人を此等機械の由りとする操縦に依り
 て決するんとする傾向あり、此の如く此の本
 学を中一のつりごとを便とするもるん歎
 見此のものを著し一程の成とる能し得ん
 くんハ中一機関の立巻のりありては也
 と又同じ中一のつりごとハ薬の原質をのり
 こと立巻に行ん今次の習ありハ現に此
 事用法を用ひつゝあり、**習**と云ハ氣、何
 んを因縁のちり近接する、**世界**の又ハ地上
 の家ありと立中一福とんとして、**習**ありて

その七証言ありて也、**世**ハそのへて
 行のりことと立巻と云ふ、若し立巻に
 リしその今を中巻とあり、**飛行機**
 や火薬や一時ハ朝暮如く立巻と云ハん
 而して今を立巻と云へり、**文**ハハの巻と
 立巻の力あり、その今ハ後の今ありて
立巻の二字、**習**ハ今ハありて、**習**
 を習してのり、**飛行機**ハ火薬、**習**
 中一の習、**習**ハ今ハありて、**習**
 ありと思へハ之をあるし、**習**ハ大なる
 立巻と云へハ、**習**ハ不可なる、**習**
 習し、**習**ハ今ハありて、**習**ハ

皇帝皇后御下馬の行儀と乗る英名記の記
りたるは、有史以来天子の行儀と乗るの四に列
す之れと云ふ所あり

高橋盛士に於て支那人の米田に遊ばすもの多し其
の成績甚しきものありと云ひ且つ日本人の米田
に遊ばすもの多しと云ふを聞き、曰く日本七雄の
次は即ち是れ人の多し米田に遊ばす、随つて
其の米も高しきものありと云ふものあり、
あり、今支那と位互を授け支那は義和團の
件に米を拂ひたる積金の運付を得、その利子を以
つて米田に遊ばすもの多し、と云ふ、支那の
米田に遊ばすもの多し、曰く米の大量取り出しは先
に

佐藤昌武とシヨンスホアキンス、曰く是れ多し後を
り、佐藤の大量取り出しのや、すべし形式を撤し
て、新に開拓の田のあり、その田を修め、米を
取り、後を著し、世と云ふなり

此の

○頃日午後より佳節を散策園方を過つておをす、寸
珍を文半一獲可なり。漸や佳節の香に傍を染む、
吾んを東園方に散味あり、但し一旦集めし之を
散す、再び苙集、意ある可し。此を在書、新
しといふ傍、動くを考ふ可し、此も坊可得す、
このためし、珍考にあり、此も坊可得上、五
くし進むを妨げず、其日、物外、西航録大
本白散、林田の花うし、林田花記の印あり、
其号、鈴の印と稱す、有日音、鈴、林田、海
あり、音、鈴、林田、園方、此の鈴の音とあり、
此の印、林田の花記と在、珍とす、毎、
雄、英、後、林田の花記、や、推、す、此、を、得、し、
回、く

雜劇十段錦、中集本也。此之嘉靖の精版なり。朱世元其他友那名海の花者即ち前年文苑を並りし高しす。羅振玉見之珍し。瑤瑤版。所し同好を願う者即ち此者也。其評に羅の考沈あり。慶本するも六味ありし。三。白。堂心齋。如馬天江の心より、珍者ありと堂の口説。此畫坊法物をも六味あり。味に過あり。元年を海と好しを得ず。今之れを辨ふ。其考の海を醫うと云ふ。北征の本筋夏の具と云ふ。○所今日深とし。念心の考を好し。自寸珍。堂と作る。前舟来既。成る。よの十卷と為す。一。名御を醫し。一。楽阿。もんとす。一。耳。騰。方

終るる左の如し

一 秋山陽唐地新選

三冊

一粒珠録 自選業書

六冊

一 花曆 一 花月令 一 紫紅録 一 酒評

一 論畫片 一 鞠墨腴詞 一 端溪硯石考

一 水玩石記 一 湯美茗茶壺系 一 考書法文

一 中唐突政 一 芸室雅多 一 仿園酒評

一 飲酒八味 一 酒政六則 一 補花唐拾遺

一 花鳥春秋 一 觴政 一 酒異名

一 杜康壇上酒徒 一 美人譜 一 山陰論酒詩

一 賞心十六事 一 詩話百則 一 麴香録

一 印文漫抄 一 印文抄出 一 冊

元治中名山堂

一 麴香録

一冊

日本の名勝詩を録す

一冊

北尋ハ寸珍本にてもある一きよきものなり
無きものあり、故て勝言其淵を補ふと云ふもあ
らず上述べたて今も喫用にゆえりるべきが然
らざる更なる進之會心のなるを録し二十冊三十冊
と云ふは寸珍本中の尤なる者とするんは
と云ふハ余も未だ眼に座すやうに字字
眼容も文字も拙也、唯れ無き優つと謂ふ
七月十九日

○夏月事無く多分をねあ、**中**に北尋也原え
梓海す所の詩法(正書雪新書あり)を觀渡し、合

心の詩法百則を**選**ひ、日課として毎の二十則をねあ
五の例として成る、手抄粒珠杯中の一、元の、余はを
心くすも最も詩法を愛漢す、詩法は隨筆すの
尤も風味あるもの也、あるものも則を**選**て他
手抄一冊を心んことを期す

○山の田舎を遊つてすのの書とす、而して其の欲
する所のこの風味の者こそある、同じ茶回りの
畫に回る者も、一も限る、餘のれ風味の者中
流布を主とせし、道樂のなるに、此り僅に田舎に
を目的としてる者多し、北尋ハ版下七六五
に可也、而して畫を揮する者めり、七と一時の興に出
こものるハ冊數多きも二三冊に過ぎざる、其の出る

其價を高くする能はざるを以つて其地甚比之れを重んじ、
多く瘠紙と云ふ目を通りて於流のしつとあり、
あべも也、恐らく後世も傳はらざるものと此類の者も
歎、余の此等の書を過るに敢て後、傳はらざる事あり
あはれ、聊か其の滋味を味いんとする者也、
其味に傾き此類の者も棄て、
七の之れを拾ふは、
○神田の書房に、
に係り、
二冊書とあり、
最刻し、
あり、
○七月十九日、

印を湯んと靴する年あり、
すゝまの、
ん心、
と留せん、
○七月十九日、

七月十七日録

午後日若熱、
す、
名を、
録中、
と云、
云、
流、
とす、

せんしす

○七月三日、わが内子を伴つて早稲田まで
箱田まじの電車に試乗。早稲田の電車は概して
四十或のめりうらなひのうちに到る。在村木
のあたりは秋、葉が黄ばき、もろもろの
木を渡り、こゝを過ぎ、狭き路を
まわく、山麓地に、稲穂をまき、在の畑を
見、畑界を道沿を隔て、前面の畑の真中に
家心をあしつてあるものを、母畑在、在村
林、家、陸ろる例のコンソリ大木の園境を
守り、其の右は空地、左は山麓の畑、或る年
まの千ふゆし、秋葉の中の家心の心おまが物

のり、地味も、このころ、成増の園境を
まわると、河川が、坪十、北の地味
也、秋葉の中の家心の心おまが物

は、午後、又、北の園境に、散策、二、三、方、庄、を、
めぐり、こゝを過ぎ、坪十、北の地味と
なる、北の園境に、散策、二、三、方、庄、を、
本、版、式、の、後、余、一、部、と、な、る、も、も、と、
り、和、版、文、化、年、刊、の、整、版、也、他、版、に、比、し、
式、大、に、自、也、北、和、版、初、め、の、所、即、ち、購、入、
南、北、私、記、と、帯、し、た、る、十、冊、の、書、物、も、
一、卷、の、書、物、を、携、し、細、字、甚、に、自、也、元、の、
の、事、と、載、す、支、那、人、の、近、年、刻、し、た、る、者、也、元、史、

唯此録翼と得えんは其の中無き所之を獲に
 うを幸とす別々著多あるを批評宋詩鈔二冊を得後
 元林山陽北産二家の評語を巻輯し著者也
 巻頭に桑原直忠の序文を収め、略ひあり、試み
 に宋の一物と對照す、版式全くと同し、唯紙薄布
 中果本に数飛次挿るゝ、是れも其の標記あり
 仔細に検めん、教忠公の撰ハ補刻し、其の如し、大
 阪の考實傳り、之んを為さう、こん即ち浪舟舟の著者
 山本が未版の著者を利用し、こんを為したる、其の
 改訂實の特徴は、一則と為り、是れは
 の七月廿三日、その午後、も銘夏の教策を試み、尙の
 こと、其れに就て、ゴ、い、あ、を、を、一、表干を、

こと、其れ者目、曰、横山由海と、その優劣あり
 抄評し、その後、海依紀、い、ん、と、あ、の、四、年
 のゆゑ、を、曰、月、に、美、作、え、あ、漢、文、の、存、あり、井、上
 文雄、の、文、の、存、あり、冬、産、の、油、信、を、操、り、し、る、の、
 二、頁、を、挿、入、す、其、人、此、の、抄、評、を、ま、り、あ、の、に、あ、る、
 一、枚、あり、曰、柳、北、詩、文、二、冊、柳、北、の、傳、え、ら、る、文、を、
 集、め、ら、る、盛、を、の、代、に、刊、行、し、る、あ、名、深、の、を、
 其、一、枚、あり、い、う、る、と、い、ふ、其、の、文、を、今、考、へ、て、見、て、一、種
 の、味、ある、一、枚、を、ま、り、し、曰、表、簡、高、の、思、ひ、又、
 を、集、め、ら、る、寸、珠、を、試、場、に、麻、を、多、り、り、め、り、何、人
 と、是、れ、此、録、の、又、あり、異、と、す、る、是、れ、と、い、ふ、と、素
 子、才、以、け、る、也、曲、録、二、巻、附、する、其、曲、考、を、

と云ふ大なること立派初年海富王の御所の編する所
也、寸分ありしを獲りて、集古名公畫式とて部を来、地
方高橋孝保の編する所、村山正教村田秀吉オの
翰旋により、孝保及後、後合、伏巻の所に此稿のあり
しを修補し、梓に上し、なるもの也、坊写多くあり、
所今の刷行に傳り、世印刷先を大に頼也、余毛
かく、これを右傳の店、既、に、る、も、自、其、の、者、者、冊、の
粗る、もの、念、の、物、動、を、り、而、し、て、今、日、得、る、もの、を
初編、を、稿、に、意、に、満、つ、外、に、井、板、紙、氣、千、を、獲
り、ん、を、皆、採、り、て、是、を、ふ、也、日、中、此、の、者、を、獲、ん、
の、夜、所、し、る、も、翻、誤、する、も、所、今、の、常、習、也、
心、吾、前、も、と、粒、珠、紙、に、題、馬、換、紙、と、ま、を、取

のんと歎し酒に酔するを詠者を蘇州とて
あするを曰課とて、名二十、翻刻とて、
リ

七月廿四日、房井一才、信、廿、紙、行、報、の、あり、余、の、稿、採
活、を、と、り、余、誤、し、て、し、り、く、三十日、連、載、し、是、の、材、料
を、慈、ん、と、約、り、房、井、一、才、の、稿、獨、生、業、す、所
あり、終、に、未、保、と、し、の、題、下、に、書、る、稿、を、掲、げ、し、て、決
す、未、保、と、い、え、ハ、夏、侯、に、於、中、する、の、題、も、勿、論
め、し、れ、し、裸、體、の、る、り、を、録、ん、と、い、ふ、も、あ、り、
凡、そ、天、真、海、寂、精、作、的、に、保、と、云、ひ、得、べ、き、
と、採、報、せ、ん、と、し、裁、え、る、胸、臆、を、擧、げ、此、の、題、に
入、る、へ、き、し、の、を、棄、し、す、の、こ、し、て、四、十、日、刻

を得たり。毎年秘しを獲ちて教と贈ふては、あ
はれに好す刻と得ん歟。いさふ其傑を
題しし。海客に一月。海味法と掲げたる
例を致し、其巻し破天意の考を盡し、
○廿七日、その七午後を以て、其寸珍をを
授けあり、其大へ前の一書、其唐土西湖志三十二卷
を獲、此を寸尺版式合格のより、其寸珍をを
ハ若干の欠をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを
且、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを
の海客の題を、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを
余前年大改の座向に、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを
の二冊あり、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを

を以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを
七第三冊あり、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを
と北してあり、他、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを
壁二冊、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを
書一冊、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを
自ら、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを
○坂の四巻あり、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを
下巻の行あり、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを
五巻あり、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを
せり、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを
ふ所也、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを以て、其寸珍をを

この本簡えん夏生美松宮に寄せるこの地は
美の夏目成美松宮に二の罪也あ人の
情に親交ありしとみかひし聴く子也余一匹
芝草しなる昔問を譲り今再び芝草集の意
あふるあふるも流石に昔問の滋味ハ忘る
ぞく五美年の原意を謝せん其趣をささぐ
ゆにやの吟村秀可なり一編を系する福川
夢窓子の詩梅也福川山梨玄度とそふ吟
松又説文のそふに松は松高極むをか、日景敬
てゝゝ善なるなるて説文のそふ出るありし
此不る松の情を一紙に記ししことありし
その情にせしことありし稀なるこの地也此

情の勢夜を命を松のよめをそと福川の松
しし出たなるこのよめを松の藤王宮の七絶を
しなるよめをそと松のよめをそと松のよめを
そと松のよめをそと松のよめをそと松のよめを
終に情の勢を命を松のよめをそと松のよめを

大正七年七月廿六日記

○此の松の河魁七福一年のころのころ海軍や
寺とゆめをそと松のよめをそと松のよめを
この解決を系したるも終に成るなりし行
詰りたるよめし、そのよめをそと松のよめを
決如く事記すこととをめぐりし松のよめを
こ意而を糊塗するこのよめをめぐりし松のよめ

扱交を五年のころにきこむく天竺一流の事と申在
すゝ波々々々結果として益に海軍等と増ち
せし見え今に山崎若たら天竺側の目代とも云
ありき山崎若たら例の幕後をふりおのころ
を勤むすそののめり山崎も定見とて山崎の
ころころし其の意見の及度常しりき山崎の
と并出するも日頃のて地の様子を自ら
此男に納得きとせん何ぞも七行の難きは
このころ今更ら困らること上りて山崎
山崎も天竺の後物を大隈侯に送はる
あるとして山崎も一書を記すつる者侯
也い止む能くせん更らあともうして其のあ

をを希い侯口を流りしる様々海軍を
一七侯に海軍を流絶せし今に於て是
想ふら自分の面目を再び賤すものころ
破るん海軍の志を果と人言に上りて其の
怒に天竺の出来のころに山崎の
あつらふころに山崎も天竺の
て前日海軍の事候に山崎も揚文の
る海軍の事候に山崎も揚文の
て海軍の事候に山崎も揚文の
と海軍の事候に山崎も揚文の
山崎の事候に山崎も揚文の
山崎の事候に山崎も揚文の

海軍の戦の前の○は如何にも自分のすべき事をなす
てとちよほめ人をして後悔せしむるも種々の
議論あり天狗を退けしむること已むをいふ
とまんふあふあ人も是迄思をせんぬしとせし
えすふふのありし頃としヤツトのころに島
の後悔を兼しとらると之より、自分の中にも
部しんを天狗を退けしむるはたまふこと
こ一旦内法しむるは如何なるに依りて其の
先ん部しん如何なるをいひし自分の自
身に如何なるをいひしむるをいひし先んは
自分を取て作らるるに後悔するをいひしは
ちんす、又天狗とせしむるは如何なるに依りて
其の

も亦とていへば、但し天狗より敵逆の言をいふ
今先のこまの如何なるも先ん後悔をいひし
而して自分の如何なるに後悔する能ふはず
とありしは、こまの上で如何なるにありし
言の如何なるにありしは、先ん後悔する能ふ
まうと其の如何なるにありしは、先ん後悔
せんす、又先ん後悔する能ふは、先ん後悔
る、こまの如何なるにありしは、先ん後悔
後悔する能ふは、先ん後悔する能ふは、先
ん後悔する能ふは、先ん後悔する能ふは、先
ん後悔する能ふは、先ん後悔する能ふは、先
ん後悔する能ふは、先ん後悔する能ふは、先

一五五

美われぬかの海軍部令は、先ん後悔する能ふは、先

こゝに思ひの、馬鹿氣の、
を待て、
もあつたの、
○政府、
河越、
正に、
を法せ、
終に、
又、
進退、
と、
松の、

こゝに思ひの、馬鹿氣の、
を待て、
もあつたの、
○政府、
河越、
正に、
を法せ、
終に、
又、
進退、
と、
松の、

去るを、
或、
と、
原、
政、
を、
二、
満、
所、
云、
戻、

とある能いさゝかしくもなせしむ、何れも今の尺方を
以て推し測る能はず、葉舟官儀の尺方より國民
の尺方と云ふは異なり、物候の節節と推してその文
字に於てその進退に於て七言論自由の言中厥に
於て七、考也の記を以てその後、皆録すの言中、葉
舟の九りの葉舟所々の九りと云ふ一冊に
二二と四とあるは葉舟の九りと二二と四とある
は也、此の國家大切の節節に於て其の老を老を以
て府の者れを載しんと國民の不便あるものなり
但し由る國民の未だ此を確しす意を政府と曰
ふべきは政府の一日の宜を偷む所以なりと故歎
す(ま)に國民のしるすの道なきものなり(七月末の記)

○國書刊行會より本報通紙提要の部才一巻を配本
し來り、此書は刊行會の初期時代に於て刊行の候補とさ
るるもの也、大部のため後二週し居り、其の刊行
するべき程の旨書種切りの有様なり、今刊行を注意
するものと云ふなり、歴史に出る提要は年表とも又、ま
よひとあるなり、その流瀾のものはある。

此書、官儀の大著が林家振ありの事書として、最
七次とあるものあり、歴史の節、節は其のよ
うなものであるものなり、その流瀾のものはある、其の
うよ、無いのものあり、係し、長所の無い譯の
もの、後世歴史を編む史料として、其の價値
のあり

一才一 通鑑と題答へてあるが官選ひである
とあるが著者の私見の史論として附せぬ
そののどどこまひもさうな本位ひある所
一才一である。

●日本の歴史として先南佛教資料を忘
ちて排くぬべきである。これと著者の本
道義の佛教論味にある所さうさうの地を
を材料とせんさう。一才一である。

一ぬや朝鮮の史料より多くをいれんとす
るその原が恐らく全教供へん獲んとす
七能いへんさうさうさうのひある。一才一
此者：元とんと史料とさうりてをいへん何者

りてある。

一本書の史料の所、其をを感するは漢書印
り室町時代である。初めの代の関東と関
する又書記録の事、其の古久之しを
のれ、いふさうさうさう引いてを
の

一此の編纂の時代は足利の代と銘う素さ、
つてさうさうさうのつたぬの史料もさうさ
あつたとある。

一但し漢書をいへん史料の出来と銘う
い体裁の出来と銘うの、一才一と銘う
さうさう

○此にぬきかゝるに、家名しと、おれをさうりしと、小本漁り
を急つてさうりし、そのうち家名を傳へて、神田のち
なを、ゆめを、海のことと、漁りし、ちやうし、一丘、七千、又
とぬきかゝりし、その、池、も、場、の、跡、跡、更、その、今、の、ち
の、二、市、し、さうし、獲、れ、完、と、その、を、使、う、る、ち、ね、を
買、し、と、ゆ、め、を、さ、ん、が、果、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が
二種を出して、示さん、と、一、ち、ち、ち、成、富、の、版、の、ち
の、跡、跡、約、説、一、烟、葉、の、著、し、せ、し、こ、す、尺、余、の、説
に、合、し、且、つ、著、者、の、ち、ね、を、さ、ん、が、著、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が
物、著、の、著、し、元、流、の、教、正、版、ひ、江、戸、の、花、柳、を、傳
文、の、七、の、し、と、の、ち、此、者、の、今、ち、著、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が
さうりし、と、ゆ、め、を、さ、ん、が、著、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が、著、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が

ゆけの、さうり、し、年、を、さ、ん、が、一、と、ぬき、かゝ、り、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が
もの、成、り、の、こ、と、と、口、の、ち、ね、を、さ、ん、が、著、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が
達、す、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が、著、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が
○一、此、年、の、ち、ね、を、さ、ん、が、著、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が、著、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が
の、軍、士、の、義、政、次、子、二、冊、の、由、漸、や、と、出版、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が
朝、出版、部、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が、著、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が、著、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が
刊、行、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が、著、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が、著、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が
換、る、こ、と、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が、著、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が、著、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が
さうりし、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が、著、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が、著、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が
名、の、用、意、を、中、に、換、る、さうりし、得、る、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が、著、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が
一、也、此、に、ゆ、め、を、著、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が、著、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が、著、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が
と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が、著、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が、著、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が、著、し、と、ま、さ、ぶ、の、ち、ね、を、さ、ん、が

その書目として三十則をの修りしる、例の錯夏
の課の抄録五六枚終り漸く傳あり又神田に出し
者方と傳あり寸珠を過り傳あり春傳の真珠
昨夜隋煬帝史才を得、まうまう真珠を遠海
に採らる似て困難也外、新刊二三種を傳あり大
所桂月の太閤紀抄伊藤伊藤の傳あり抄あり
許傳あり、由來西道河の傳あり抄あり古抄
録を巧みよ拾い者する、こと漸くまうまう、後と
て思つる、晩而後横臥觀瀾まうの抄あり後と
味いんと然る也

八月三日録

新書と傳あり緯記とある人の二年をまうまう前に出
ぬし北山内董のまう二種をぬき寸珠の抄あり

流字をまう寸珠の佳裁と作つたもの(手紙
傳ありと抄録あり)を踏ひ入る、世々北書に洋
書ありそのたわぶるまうまう、余の過つた
定規のまうまうまうのまう也、寸珠をを編
ふ録(抄録あり)のまうまうまう、一書を
傳ありしるを得ぬ

○八月五日拂懐に床清涼を弄する庭の木のけの
実を結びたり者二枚と、剪り瓶に挿あり、瓜瓞書
挿ありし、夏時花に三しく、大抵一日して枯る、既にけ
四五の壽あり古歌の枝百に隠えする歌、お祭あり
花及川あり也、古抄ありしり念流に過けり
柳湾の詠茶詩録四冊、まうまう、余の千巻

本二冊欠不あり、初を完本を得るを喜ぶ、此方檢
めて稀也、隨つて價七不廉也、四冊の本も三冊止す
幾也、閑を得る儘に散亂する回考を整理し、のさ
り考函數個に納め、此年尾考若干を賣り、その
二考匣に空を生ず、彼の購ひたる回考寸珍本ハ別
本を必しとせんと、善道本ハ日月の抹集漸々、堆未比
近隣の善道本の散亂を憂へてあり、其初めを整理
せ終つて空雲の善亦應じて有り、然れども一切珍本
ありず、湯淡せば月本、湯淡の田川の某考本に
初珍のりろは又、原考と稱す、自本らんハ流しき
この也、す月と稱す、京都の流と有り、内に抄しき
をたひしして笑ひ、その抄年回とも、画家某料記を

：移後扁額を挿さもす、一、四、花蓮、身、保、ま、ん、
ハナレシ、(不)難と訓する、所、功、向、あり、他、の、を、初、の
款ハ三階、掲げよと物、江、志、す、其、の、流、を、
「青、階、閣」一方の保、ま、の、敷、で、い、え、と、保、を、
以、と、或、る、人、の、言、ふ、と、す、ま、き、
此、上、り、の、え、と、ハ、起、初、考、と、云、ふ、意、也、
此、流、が、ある、い、その、流、の、意味、を、
云、ふ、と、す、ま、き、
銘、夏、の、日、課、と、い、
の、騰、空、に、著、を、下、し、如、あ、
き、よ、の、ろ、ん、と、名、無、し、
寸、珍、又、年、に、豆、こ、ん、と、
○八月七日、録す、
高、の、山、峰、と、

この頃より、^也学校の改正校規と実行するに、ついで
の維持より中大隈侯爵の指名をうけて、終身維持
員より余を除外せんとする。校友委員は寺の兩
定につき協議する。余のそのまゝを天竺を驛動を紀
録法を以てして大隈侯爵断乎とて、滋賀中
其他校友三回に及んでの復讐運動を拒絶せしむ
こん誠なるべからず、然るん天竺側の校友委員
寺の天竺の維持員に復讐し得ざる上、天竺の
面目を保ちしあるは、最初の方角は、ゆゑも
あつた遂に、電して復讐をぬき、とて為し、たしな
と云ひ出さる、ヤツトのふらふら、破れ、あるは、ゆゑ
い、漸く復讐する、とて、さうして、然るは、切ら

て、金を田中し、喰のあつた、遂に電して、さうして、
まゝに、梅り、端々、とて、余の、面目、問題、生ずる、とて、
あり、自分、敢て、終身、維持、員、に、復讐、すること、を、
ある、とて、お、備、し、お、あ、つ、て、復讐、し、得、ざる、
同、く、除、お、さん、と、ま、何、か、除、お、さん、と、
の、復讐、する、公、け、さん、が、お、お、お、お、の、
天竺、に、拘、する、と、お、お、お、お、お、お、
寺、の、新、維持、員、を、お、お、お、お、お、お、
面目、と、する、何、事、か、と、お、お、お、お、
自分、の、末、序、の、故、う、時、に、維持、員、を、お、お、
と、て、終身、維持、員、に、天竺、の、お、お、お、お、
後、する、と、お、お、お、お、お、お、お、お、

前彼等暴徒、根もなき言ひを以て
言へば是れは、いふに似たり。然るに
自分敵を復讐を欲するは、固より
たゞ大隈侯との指名の由りに入らざる可からず、
指名を元の上の自分の意見を察するに、
一差支あるは、侯よりして、大隈侯の復
讐を許さざる寸法を以て、余を指名せし
に、寧ろ其の由り、其の由りあるを以て、
合致の事とす。然るに、其の由りの内、
動の向ふなきは、余等も人にも、
事とす。然るに、天竺の西月丸潰れと
するに、困るとす。何れも、
とす。何れも、

あり、即ち、即ち、即ち、
の、の、の、
候、候、候、
一、一、一、
海、海、海、
余、余、余、
リ、リ、リ、
井、井、井、
一、一、一、
大、大、大、
理、理、理、

今人多くを言ひ出すありて一色する事、ところしとおお

八月十日午後佳あな御のことく、市街へ市中へ出たり
あり及指し、御出、出で借る、二三行を鑑め、
四の仙室、藤一本を得たるを、
物中者、
瀛奎律髓刊談十二本一画、
本也、各表紙に柳湾、
二個の朱印を捺す、
此の故、
甘茶巻の終り、

其の後、天保六年、
隱居、
晩年の手記、
を、
と、
合指、
と、

白香、
の形也、
と、
と、
と、

虞山錢氏尊王著漢書每末記凡六乃有一種詞譜
其一也書既成秘之篋中知交罕得見者亦絕檢
討校士江南自題注名士大會秦淮尊王亦在座是
夕秘以黃氈青鼠裘熟王侍書史改謔遂得是
編命藩臬吏抄錄半日而成既而尊王知為非
絕說得顧無可如何也但以香牋竹筒戒勿傳
傳于外非絕乃拒言以謝之後其行稍一傳布余
今春容全後偶過者非備閱破帙得是書以
書缺故百購歸讀之則送聲錄詞含宮室商
無毫釐分判之失宜乎尊王實為執中絕
竹筒檢討之思以計贖也曰人送過以副厥氏
爰述史終末於詞端

道光癸卯冬月

蓮叔孫殿英序

ふまのいものうへ外に石亭画法、香叶墨紙、秋毫
潤活法、梅邊菊邊、才を得た、珠考ふてあつても
皆珠味のもの也、梅菊邊は宋の范石湖の書也
えんと先取をも取れりと思ひてさうし、この偶れ見
ありては早くと習ふへし (六月十三日録)

高村五夫其訪、少日談論す、高村は洋書し
家より前年早大に校と余の書係をひり
し時此人に托せし物あり、洋行後初め
て見よ、高村洋行中の記行あり、美術
史禮記と云ふ刊本也一冊を贈る、高村画
の印に珠味あり、此の七二三顆の珠を
想くまう、黄麻るるや書やを問ふ余

あしと然るまじと審をし、印材の各様を没
し所巻のいものまを亦夫、高村時と印力を
弄り、拙るものも今もと考へん、此印を
余切に送通すたふ、収るるるもの心
也

高村の記行、一文房後横所して後又もその
をえん、まのいものま、去り所画を
みあつても也



○近刊の漢文の分と報山陽朱批梅鑑湖記二頁を
載す、七と題し、又章に載する所を秘載し、其の此原
本何れに存するや詳しう尋ね、完結せしむる云々也
憾らう、技家所在を知るを得、稀者刊行存に摸
本と此の二冊を有る者、河に候ありまぬ也

大正七、八月十二日記

○八月十二日、炎暑を以て午後より散果二三の方
肆を遊ぶ、本に於て得る者、史林遺稿十七冊五朝別
裁集との多、惜むらくは別裁元○の部を測く後の
補入の事を期すとす、此地に能方若干と購ふ、其二
桂海虞衡志、宋范石湖著の所、支那の昔の者
中に從てその名日本版の珍らしし二冊あり、文に
一刊に傳ふ、范成大桂林、宜游の日其の景
景似がを記するもの、瘴瘴の地なるもの、此地
名の記支那にも多くあるが、范石湖は多致味の人
として、その所が故味の記するもの、此れ又其一也、其二
山本徳閑著の所の、藝叢書述坊、其の記するもの、其
故也、その初版を購ふ、柳屋の、款字、其の霞舟の

西有、江多子七高、其味も、茶も十、一、切も難
き也、鄭修の意、一、等、十、野、湖、山、琴、み、心、所、の
筋、氏、因、坐、一、筋、し、等、的、前、首、米、野、動、の、お、柄
之、れ、を、淡、め、げ、物、と、具、味、を、り、此、等、の、は、往、々、現、下
の、子、を、言、め、ら、ぬ、き、こ、の、ち、り、他、二、三、者、も、特、に、好
ま、る、と、思、ふ、事、也、

米野動、八、割、西、殊、一、日、改、神、一、甚、し、く、終、一、一、河
國、の、兵、を、出、し、て、警、戒、す、る、の、に、已、ま、る、と、思、ふ、事、也、
波、各、化、一、及、び、帝、都、に、於、て、も、毎、日、波、浪、聞、き、又
軍、隊、を、出、し、て、警、戒、す、る、政、府、の、沈、重、を、感、じ、
て、驚、愕、一、測、す、る、報、道、を、報、じ、て、揚、々、と、を、
禁、し、入、心、怖、り、たり、政、府、に、於、て、ハ、廿、人、以、上、の、上、取

万、相、替、り、へ、て、市、上、と、あり、する、者、日、と、測、す、る、の
令、を、も、た、り、完、一、七、武、者、會、を、た、め、て、一、の、女、一、帝
都、の、兵、一、ち、り、と、り、一、一、と、思、ふ、事、也、一、將、松、石
燈、を、流、し、て、一、亂、徒、一、休、め、ら、ぬ、と、思、ふ、事、也、一、亂、徒
一、窮、を、叫、ぶ、の、を、一、掠、奪、を、め、目、す、ら、ぬ、と、思、ふ、事、也、
一、皇、室、を、も、た、り、三、る、事、も、同、の、故、助、を、下、物、を、り、
一、政、府、又、一、千、一、百、圓、の、四、幣、と、一、つ、て、米、の、路、
一、買、を、策、し、一、知、り、と、一、ん、と、一、し、ら、ぬ、と、思、ふ、事、也、
一、収、拾、を、り、
一、米、の、路、の、米、價、の、大、暴、騰、を、策、し、し、ら、ぬ、と、思、ふ、事、也、
一、通、貨、の、膨、脹、一、よ、り、一、米、の、本、を、低、め、あ、り、し、て、
一、一、的、を、新、途、に、す、一、政、典、を、わ、り、し、ら、ぬ、と、思、ふ、事、也、

を収録するに言書家の手をさす所也。政府を
言書家にして其曲好を断し得ず、厚款
今も必るも其は其を^てあて評するこ
とを為さば、其も亦や幾傳るの内閣に辭
職を逼るの運動することを、而西を一
新すもあらずんば到底人心を鎮定す
べからざる也

八月十七日記

○八月十七日、今日物々其書家の古しきを其家及草紙
に就しありと頼りく、向の古物送りし出さうけ、一書店に
於て其書屋山の花月抄を其冊を其後其、唐六如の
花月抄：倣心ひくしものし其書屋に六如の抄を

七附より、茶を出ち、年々代に任に修らるゝあゝ集り
に載せお、お外二三子の存あり、下浦味を其書
余少時六如の花月抄を愛讀す、而も茶山の倣心
なるものも六味あり、又漢字の書店に四三を其書
向の目録、華族類別譜二冊を其書、華族譜、銅
板袖珍もその先づく其書に是のその、向の目録
も寸餘ありと友即法を其書也、昔日茶山二冊を附
其本と其書ありとす、珍下や六如の二者を其書
其、教養の序に銀は、これあり、其書の跡を
見る、大高店に硝子を其書、外圍を其書、其書
其二三を其書、最早鎮定を其書、其書
又其書を其書所、其書を其書、其書

○坂上史家... 北越詩話の扉に之くし... 記
成り... 北の... 記
を入... 記

北粵詩話成作五絶句

話作詩亡我亦知休言漫倣宋人為體裁略擬全閩話据
據新編北粵詩

華禮之切推雪村春秋六百通淵源義兼野史與州志一
例莫將詩話論

遐僻山川產霸才區區奚翅一霜臺當年數子信堪惜不
向中原樹幟來

藍澤南城水落雲濤新得西水諸子詩
雄偉而終身馬位邊隅予甚惜之

幽德潛光發者誰搜羅竟及故交詩前賢辛苦多孤詣輕
薄浪傳談笑資

蒼叢編成髮欲疎工夫借病借忙餘卅年仰屋著書客却

北越詩話原稿

五峰草堂藏

著人間無用書蕭子才有借病詩予
曹倣之作借忙詩

○湯沢は月夜那、由者おのきと紙物や、石塚心
 の井草一技を好む、井草は多く茶室のまんのこ
 とも代ハの家細く刻り茶室、うらのぬき
 う常きんこんといふもよく刻りて来毛也
 ハう、能楽之也、多分細字、古用いけし未だ試み
 ず、日又京都の手もする、古物四五を功のて本
 を造り、其の目を好む、好くす、う、手、七ハ
 余のあ中、あるもの、ま、後、
 きとの、あ、早連、
 印、友、郎、
 と、と、
 ぬ、く、し、
 十二

大正年去るこの書修と後、(八月十九日記)

○京都の古本、お、注文の寸、本ニ、
 十五行、
 丸

- 聆矣絶唱 うらや 女四巻 通判集
 古物揃 女帯いゝ路 海防集
 王荆公絶句 小豆の白漬 和歌
 か、
 後撰和歌集 三本 江南有表
 菅菫白集 水宮集

格、
 の、
 七、

眼を解す。この語を兩側よく読む意味のあり
てとんる注釋をも見ると一向解し盡すべからず流
石に此の印の研文家の注釋を以て人を理解せし
むる此の政眼のこととせしむる出版せんといふ
内にも本書の著と云ふべきことある（八月廿三日記）
京都細川者屋に注文の寸珍下三四行刻す（湘雲
詩物）四冊をえん（湘雲集）（二冊）湘雲二集
二冊と修飾し終る完本也。これより湘雲集
湘雲二集の離れしことある（定本）とあること
あり外に定本二冊に「碧曲終の巻」と題す
七の一本の巻尾に「元禄八年の年譜」と刊す
と此の定本もこれ終る也。惣故に「湘雲集」此終る

よと云ふも殊とせざるを得ず

○又方振海合の在り出づれば、秋に松樹の枝を懸す
るをとりて養りモツユクヤサシ、^秋無葉の延び、^楓
樹より虫蛇うのき、今うボラ枯枝も交り、一本八分と全
部枯死し、至つた、らげさるるハビ、この枝を前裁
し、今枯枝をえりやう、^秋枯枝を懸す、^冬枝をす、^春さ
やうむ一時の間むるも無葉の没頭した、夏時の海合
つ在るさうく、若く本書も、^夏行く氣が起る、^秋
村のよのを早魁び困り、^冬夜毎に新雨の（中）動を
わつて、^春さうく、^夏さうく、^秋さうく、^冬さうく、
本書の庭園の流のおを、^春のし、^夏のし、^秋のし、^冬のし、
さうある前も、^春に、^夏に、^秋に、^冬に、^春に、^夏に、^秋に、^冬に、

こと「容易の子業むい」に「ある七志きう」の困難を修
くして居つた前年漢愛治もを要ひ換るうの以後海
況しも出ひ、あるの存びまのなる本館「中」に「更」或
く「條件」を「現」の「利」を「試」みることを「以」て「論」じ、
前年「今」所「と」るうの「以」朝「英」二が「万」に「立」つて「多」く「後
條件」を「後」を「と」る「考」の「年」は「説」さんとして「の」心「ある
が」今「朝」次「七」致「した」る、今「う」の「と」を「条件」と「と」る「評」に
「ありぬ、あ」う「十」番「や」十五番の「金」を「流」し「九」七番の「暖」足
を「買」つ「る」も「こと」の「樂」し「あ」る「と」ある「に」主張「して」居「る」
(八月廿七日ある))
○「あ」の「と」廣「井」と「れ」に「あ」る「久」寛「と」ある「此」と「流」る「供
こ」日「を」理「由」部「に」携「え」新「寸」創「刊」の「事」を「趣」議「す」

内「あ」の「五」番「の」ま「を」出「金」する「と」し「た」う「漸」く「氣」配「を」
得「て」後「方」向「の」金「と」も「係」せ「し」ま「る」出「金」の「元」は「略
り」ま「る」た「う」こ「と」に「ま」る「ん」は、マン「ガ」ウ「三」十「番」の「ま」ま「十」万
の「株」の「出」金「の」に「ま」る「る」あ「ら」む「と」し、
九「番」の「病」物「老」死「に」陥「り」つ「て」ある「若」野「一」印「に」後
を「後」を「現」の「金」を「高」田「と」し「て」論「せ」し「た」る
こ「と」も「ある」と「し」る「朝」由「金」と「れ」に「あ」る「向」を「流」る「こ
と」も「一」つ「合」り「せ」す
仲「金」の「出」金の「者」仲「金」又「中」を「つ」き「せ」給「て」後「の」書「林
池」を「見」る「に」元「寄」せ「し」る「四」五「の」寸「尺」を「引
元」り「し」る「と」し、
主「本」う「ひ」ひ「る」者「の」外「手」續「を」し
目「次」左「の」如「し」

の希子人名録
若菜よかあるを

二冊

吹末本士の順逆を別
考画鑑別：便しき者

近世小集（杉陰旋著）

一冊

いせものこころ

一冊

筆の本と墨

詩類傍歌

一冊

女今川

豆本 若入

一冊

女寺子往来

一冊

馬東西京池の巻し年を加出に延びるる草集の
とめたりとそふへき歌

（八月二十日録）

の所果の風雨終る家と出る能わす、天候回復湯：天
長節の丁り寒の束さる、花長を柳に因り又す
源本膝字：没頭し、十たのま日深膝字の林田卯辰

書録終に全部寫了、此有りる字一なるもの三十枚、而
餘力を以つて茶山存、春白傳、の花月吟三十枚、而
を寄して一冊の寸珠を乞ふ、而して其時を刺す、との
あり終に寸珠本古目を修め、一旦必りな目録（の）と
更なる分類と正し、二冊に分ち、日字了す、五月以降本月と
端の四月月洞菟集の寸珠本、漸く三百種に達す、而
の臣本多、とすと、黄七三ると菟集す、の採訪甚れ
つと、~~而~~菟集の考據も、七通の比、此上は餘り
み心掛けん歎、あ初る程を得んと、約したるもの其三倍に
達す、尚ほ一二年を託かふる程に達すること敢て
即ち、~~と~~あ、志、大、手、心、若、且、つ、之、九、を、在、する
に、致、さ、る、る、の、と、る、ま、ん、此、の、先、致、し、お、す、る、潤、る

又此之れを見るとき

大正七年八月三十日録す

林田師友書林壯年の次通漢したることあり
も今四のことく精漢したることあり
方寸のすま
く流傳し格が身新くしく感したるあり
唯比森川林室 雲華 木米の書一にのき記
を新くしたるあり、森川林室の書一にのき記
非田同く 雲華 男子の 烟華 坊裡の 玉人を
以つて新くせんやうと此人書を長くしたるあり
るが印刻をもとく又田有 味ある珍を
逆りをしたるあり 且つ 収 宛 家 ありし 其の 雲 花
の 田 者 の 書、竹 室 不 換 故 之 方 の 印 記 を 標
したるあり、六古 淨 瑠 璃 の 漢 じ 方 を 研 究 したる

ときよ

雲華ハ雲華 味ある自ら茶を焙製す
苦心しう、常つて自茶の味を標 伸に 献したる
ハ、その外凡 浮 光 の 態 を 賞 し、その茶に 雲 華
の名を命じしことを 甚こもて 終生の 癖としし
リと又 茶 蘭 を ぬらふこと 亦しく 其 友 即ち 移入
の 茶 葉 を 采 し ち ぬらふ こと 亦しく 其 友 即ち 移入
は ぬらふ 茶 葉 を 采 し ち ぬらふ こと 亦しく 其 友 即ち 移入
来ん、白 丸 の 造 傷 ありと云ふ
木米、此てハ 傾 倒 殊に 淫し 新しと 大 雅 春 星 以
後の人と云ふ、その 伊 花 の 標 額 を 採して 云く 昔
于 鴨 東 大 和 橋 北 余 初 訪 其 居 甚 狭 窄 架 時 亦 上

流石漢後、御書于局下とあり、家印に捺ふ所也
を酒飯也といふより、此の酒膳とて誤謬なるを
改むること井田の文に見ゆるところ、龍脱したる人
物ありしことおもひ、其の誤謬の事を知るハ
武言、昔有る歙川氏者、居建仁寺善政、お徳
の人受教、平日置室粟田山下、身服持統、
手携泥土、望之風標昂然、阮然不是也也
とあり、歙川の醫家といひ傳ふ、富饒なりし歙地
又その事を知る

○改の五卷の北張の詠を印刷して見ると各卷
の境界も全一頁餘白とする所、上巻だけ七三個
所もある、まんを何らゆへに体裁よく埋める必要

の起り、五卷の同人が五峰とあり、五峰の詠
の巻のしりとりとまん、五卷が古の詠
城の中に用とさうり、その巻を収め、
○九月二日ある事、昨の午後書と巻む
娘共をうんせり、詠をふくく、歩み、
と見ても一向、うらみの所、お生に出して、
入る、お名をのま、しらぬ、そのを授、
が、お名、そのの兄あり、そのつた、
つと、舟や船、おの五重塔、おのや、お見
あつた、お、お、お、お、お、
お、お、お、お、お、お、お、
一個、お、お、お、お、お、お、お、

同說意相可作琴女今果爾遇奇音松葉
只好象子懷沙礫應須持寸生君孰法
你宜士根崇黎瑞全有人心悟終掩
卷修細久細雨春燈坐看涼

生手予善七松在訪話何難香華尺餘
二律是乎一也今批印本書進錄以
存知者之云 富園主人手記



抹月批風筆似梅香修話入新編乾坤
葉古窮盡在鉛墨三生話句信楊柳
紅橋春夢西樓花交室相話禱如
百城舟江上漁釣豈思何主權

是二十年前何處香字見錄二律之一
三樂亦尚近流特志有人一語云
五峰寺遊後於富園



と買取りに、ある後、そのときを以てリバーバデスの
多を移免を八十九枚、摺りつけ、此の西澤
電の巻をそのとき、あつた、伝、摺動いた、三、四
以上の價を拂ふるとさし、あり、入、由、七、五、い、二、五、元
合、日、一、日、用、の、ま、の、と、い、ろ、く、買、ひ、出、る、ま、き、終
る、移、免、と、ま、し、得、免、の、中、肉、店、の、う、飽、を、し
ゆ、(中) 限、内、を、ち、も、中、一、四、八、一、五、一、り、り、の、者、老
の、故、り、係、る、か、名、洋、本、五、冊、を、贈、ふ、に、こ、ん、と、自、息
の、ま、ら、し、集、め、の、に、和、本、の、定、尺、と、し、も、か、る、る、形、の、本
が、体、裁、も、内、容、も、お、詫、ら、い、向、き、な、出、来、て、ら、る、和、本
と、も、洋、本、に、移、り、こ、ん、と、洋、本、の、寸、法、を、ち、ま、り、集、め
る、意、い、ま、し、し、動、の、ま、の、か、標、を、い、ま、し、し、ハ、

新しい所、元、あ、く、す、犬、や、の、ソ、ロ、ロ、じ、ー、や、ま、あ
踊、術、や、料、理、法、花、の、巻、ら、ん、ど、形、お、名、の、ま、の、と
燗、の、以、形、お、名、の、ま、の、雅、び、挿、絵、も、印、刷、七、五、と
巻、ひ、上、出、来、と、ま、の、と、い、ろ、く、(九月、二、日、記)

地、図、の、報、し、掲、出、の、赤、保、ま、の、書、後、紙、七、合、日
四、則、の、り、寄、行、し、こ、ん、と、い、ま、し、し、完、結、と、し、し、
毎、分、二、十、二、回、う、最、後、ひ、あ、り、入、日、々、平、均、二
五、短、う、ま、り、三、則、を、載、せ、ら、る、四、十、四、の、ま、
乃、至、五、十、一、の、ま、(き、ま、の、紙、の、お、名、の、ま、の、ま、
あ、り、う、~~紙~~、十、一、の、ま、の、種、ら、あ、り、し、し、初、め、の、ま、
こ、ん、と、い、ま、し、し、ま、ま、子、や、種、の、ま、と、ま、の、り、

○九月三日　とあるを無難のふりよすの後に、娘
のせむらふの貯蓄し給ふこと千圓を郵船
株に換えんとす。●以て同意し、せむらふへてる
切の二十株を買入らば、あるゆゑに、
まうせむらふ株の價は八月末の二万三千圓を
低減し、せむらふ又四五圓を、昂騰します。く
昂りぬ味也。古き紙の支店：唐井をゆゑ
買入をせしむる事、二万七千圓に、即ち株
を二万七千圓の價に、十株買入、決
し、せむらふとせむらふと、ついで、日石株二十
五と買入、九七と千圓の價に、
のせむらふ千圓十五圓を、
十一

六万圓の月末の所、即ち、
えつら、
る二十圓也、
十一月末迄の、
定也

○世傳の、
し何を出さず、
ある年、
八月、
この流を、
読む、
やと、

初め也故月前の心算外紙の筆を送らざる
 なるものあり併しを殊とすし

○九月五日 故より本年より北紙の紙出取上の件と
 つき行々打合をあたう上巻の印刷未だ了らざる、五巻
 とす寸紙三枚を贈る（本傳の香山紙一枚六元の紙
 巻書、印譜一）高少竹あり既し架中、あなを板
 とす積とて紙のつ、六元一枚架中の為、初め思ふも也
 印譜の紙一枚あり其の香山紙一枚の印二枚
 つ、既しなるものいふ架中、いふ所の也、活
 字中、目録なる示記あり、香煙の印あり紙一枚
 ありとともきり、後通を寄付けたりとて、
 を取りあはせし、中紙あり、
 十一

た、あ夜の酒梅に招き、道邊を、義時の宮に
 新刊出来ありつとき、春野遊、午後各散して後
 慮へしもの附載の文を後みまぬを懸す、

あつもの多を梅し、もの、困り、
 前より、園方の倚語と、
 抄録し、暑を忘る、本ら、
 若し、
 寸紙、

○九月五日 新聞創刊の、
 流傳の方と、
 高田、
 送び、

果は強御免づ返し田中徳信ハ
あつたよしと御高由と報を
梓部：北西人を鉄を
持寄に後物すると志せし
けんハ或人と後物七意味を
赤泥を之のせしと之のを
而して以てする様
の御中世也。あ人の御
はるがぶよとせし也

田中徳信有人の地より就任
ハ此後の御高由を御高由
御高由一しとこと大体の
御高由一しとこと

泥を行へしとことを得す
御高由一しとことや
として或は信有きこと
の持統の御高由一しとこと
いらく御高由一しとこと
の御高由一しとこと
あつたよしと御高由一しとこと
いり年御高由一しとこと
ことありしと御高由一しとこと
御高由一しと御高由一しとこと
て赤泥の下につまみし
の御高由一しと御高由一しとこと

あへまきめりあつて、略の問答して今取らる
ハ一方ス永叔取らるること也。危殆無き
あふ、又濫津男や信の辨疑あつたし
校交おこつたし、折南の記を今も
ぬれとあつて、我言を張つて、
又へて非難を扱へて、大隈徳長に
對して、其意を要するものあり、
二人の流石に、將來の大事に、
河原の苦志すること、一方ありし
〇九月廿九日、今朝四、徳積、
入つて決したる、挨拶のため、
中、此の四書を記する、加へて、
十二

流したる也と、その日の中、
ふんき、室田信、
又つ、
部、
の代、
中、
分、
苑、
墨、
余、
概、

まうと云ふ誤傳をいひて夏に此公の妻と云ふし
こと、在所故に述べて合書句の殊味を感じ
酒次又かゝる歌いしこと、ちを時地古より
口を得たり、此の歌はちと載せつゝある衝
撃の扶起しと云ふものあり、此の歌はし
はくはえん歌

田能村世田のゆりたる寸取本才油集、古歌を治
く披索するに得る能く、偶々此の歌を
次はるを云ふ、五峯架中、二巻すこやき
其刻をを初の一法を得、此の歌は
都より一巻の歌也

京都若林書屋、漢文一巻寸取本下三冊

別在す、其物を云ふ、甚傷せしむるも自ら
寸尺全終するのみ、三冊同し大さく、飾
と一冊毎に異なるを述べて、其の意あり、
古の歌の中のもの、多く、筆を考して一冊の

歌歌大歌

外歌

今大納言為文卿

一人一巻

の

魚生三任後

未未記 中中

外歌

押の路大納言實譽の

終るに記したる、此のつげあり、三冊も列
前著も編の故、念の也、八巻、横六回と云ふ
果林おゆ、三巻あり、寸取中、この
言、一七あり、其の八之を、後、と云ふ

(九月十二日記)

不台格す

皆帝大の前此以物傳をも琳瑯冥古店を幼の寸
珍二種を得たり一は林田の泡茶新書三種一冊一
ハ神波即山海集家の竹文書函評語書二冊一泡茶の
書ハ今更復刻し柔段因語より二冊より七の
又書傳の店既に見る況に余の架中より二七一部あり
泡茶は者ハ初印本より後北北較するも異る所
ありきも新書より後原抄録の序あり再版
ハ之れを辨し、評語書あり空本一冊一冊一既架
中より存る今回得たりは定本より外にち山延書
漢史雜傳二冊を白之れを流言なり有る簡ん
このもの 又武行全文原をより更印校のポケット

フツツと元々といふ、孫兵司馬法の三行を収め巻以
ハ射射ハ関する圖を収め

此外ハ得るもの

洲島要記二銅版

首書土佐日記墨江

和歌標

ハ浮珍といふものありきんとも赤架中ありて
妨げなきもの也 (九月十日記)

寸論を蒐集集終に大改に込め、若くは七方と
其店にあり、寸論者の目をも、七方を見、架
中にあるもの七合ありと、其の元を、二、三、よ
うけを、七、七、行、辨、入、使、する、もの、あり、(早)

「夫も、又教業の存る趣行を以てき成部形に之
字あり、故に多く抄を十ん多何も無し、唯れ其志
十印と号する印語二冊を辨ふ、又、此序を版
式と号する書も、亦画題の二冊を贈ふ（十九日記）

○昔夜の訓題七漸く進み、理より、田中徳煥、松平
伯清、中尾物、の三名と由を乞ふ一、而り中、これ迄、皆
論ずる、校反と平治を、海原即、二年一、海原を、
理より、款、幅と、論ず、し、中、及、對、する、こと、あり
と、爲、量、の、あり、行、ふ、花、故、例、も、も、の、評、論、欠、選
る、も、論、み、たり、此、の、評、論、あり、故、校、例、より、推、察、も、
送、る、る、因、体、より、大、抵、終、定、の、あり、と、考、へ、ん

は、も、高、等、終、科、方面、より、高、等、科、の、あり、阿、印、由、場
の、如、き、其、の、甚、く、漏、れ、たり、の、こと、也、校、選、と、し、之、れ
を、入、る、と、云、ふ、元、に、南、大、勢、の、天、中、流、の、所、謂、く
其、田、派、の、権、力、續、し、たり、あり、たり、と、云、ふ、こと、も、論、論、の
凡、の、こと、より、し、形、く、る、る、と、云、ふ、こと、も、我、の、復、流、も、
其、例、の、早、中、余、も、な、し、高、田、と、余、も、は、海、田、の、推、察
矣、後、する、を、不可、と、し、之、を、棄、す、あり、と、云、ふ、こと、も、
つ、ま、り、と、云、ふ、高、田、の、評、論、に、依、り、高、田、の、評、
論、を、取、り、たり、と、云、ふ、こと、も、高、田、の、評、論、に、依、り、
高、田、と、余、の、大、隈、信、長、の、抄、を、考、へ、る、も、考、へ、け、り、と
の、こと、も、内、定、し、たり、後、著、の、その、評、論、を、考、へ、
ぬ、ら、余、も、入、る、も、亦、判、用、動、を、計、論、し、つ、て、あり、

自大正七年十月至同八年九月文明書院收支豫算

雜收入	二四〇〇〇				
回單行書收入	一、二〇〇	回單行書支出	四八〇		
新單行書收入	一、九二二	新單行書支出	一、〇八〇		
曆史圖錄	九〇〇	圖錄	七三〇		
新準會費	一、六五〇	新準會員支出	一、八二五		
維持會費	一、三五〇	維持會員十五名	九〇〇		
二三期賣上金	六〇〇	二三期出版費	三〇〇		
計	五七、六三二	計	四二、三三二		

收入六十五四百五十四五十四
支出廣啓料完稅披露費千五百
其他五八〇
現品及製本代三千円
平均定價四拾八拾文、拾卷
收入七二掛九百二十部
支出六掛千部
支出四掛

新會費	特別百五十	新會費	特別百部		
通幣八百	一、〇四〇	通幣千部	出版費	六、六〇〇	
送料集金	一、二〇〇	補足		一、一四〇	
出版後、巻卷		分出版費		九六〇	
職員僱員		手当及給料		二、一六〇	
借家料、電話料		諸雜料利息		一、六八〇	
臨時給典		臨時費一切		四八〇	
大阪出張所費				三三〇	
計	五七、六三二	計	五二、八三二		
計	五七、六三二	計	四二、三三二		

收入一〇年十月十六日
支出一冊七月四九〇円
收入一〇年十月十三日
支出一冊五月五十九五〇円
書院ノミノ支出分

整理案

支拂(半年形及借入金) 二三、〇〇〇円

内増資(産債却) 一〇、〇〇〇円

残 一三、〇〇〇円

内特別収益 九、七五二円

再残 三、二四八円 (主として支拂高業半形)

外之九日未計高業半形約二、〇〇〇円

特別諸収入

未収入維持会費 (在年内収入(本部、大改支部等)) 一、五〇〇円

日新会費 (七十五、十二円宛) 九〇〇円

日新募進会費 (百口分) 一、七五〇円

日維持会費 (十五口分) 一、三五〇円

計 五、二〇〇円

支出

新募 廣告料 一、〇〇〇円

日新教科 其他一切費用 五〇〇円

計 一、五〇〇円

差引 収益 三、九〇〇円

歴史収入

歴史未収入金 (全期九十九) 二、〇〇〇円

日 未納分費 (計七十一) 一、三五二円

日 完成費上金 (甲五拾五円百、乙五拾四円五十二) 九、〇〇〇円

計 一二、三五二円

支出

歴史完成迄ノ費用 (土、土、土、土) 一、〇〇〇円

日 牛取料 (平均七割) 一、八〇〇円

日 装束代等 一、二〇〇円

日 諸雑費 (印紙、印刷物、送料、其等、その他) 一、〇〇〇円

歴史ニ関スル材料 一、〇〇〇円

日 完成披露費 五〇〇円

計 六、五〇〇円

差引 収益 五、八五二円

五、不、唐、也、六、因、五、十、幾、と、云、不、再、公、得、る、こ、と、難、き、を、成、
し、難、入、世、十、集、架、中、の、あ、る、一、冊、を、只、く、こ、え、と、
定、ま、也、枕、山、樓、卷、の、題、尾、石、十、集、也、こ、の、旨、也、也

九月廿七日

○大内為の御七本を列在の寸紙下方の如し

一 今才御集 十一片玉本多 一 最方口決

一 延の若井 四 一 職多あり 一 官位や繼

一 部名所考 一 西人心傳考 一 三重歌

一 道連寶鏡 一 頓庵居士集 一 近世小集

一 枕山樓茶略 十三行

今才御集は以ては其年々々々を續けるものなるを以て
本と云ふこともなく一と云ふことも定本也但し此方傳入
云々不慮也六四五十等と云ふ再公得ることを新きを成
し購入、出世小集架中よりあるは一冊を以て云々
定本也、枕山樓茶略、頓庵居士集は二冊也

九月廿七日記

増資要旨

本社は大正五年十月の設立にして一般圖書の出版販賣を目的とするものなれども主として大日本文明協會刊行事業の受託經營に任じ來り今後も尙同様の關係を維持しつゝ益業務の發展を計らんとす。然るに本社創業當時に比し出版原料たる紙、クロース等は勿論印刷費に至るまで悉く暴騰を告げ事業界の膨脹に伴ひ僅々壹萬圓の資金にては到底其運用を完うする能はず。殊に歳月と共に出版卷數増加して自然資金の固定多きを加ふるに至れり。今日までの營業成績は概して順調にして、大日本文明協會の事業の非營利的なる結果として本社も之に依りて利益に浴すること甚だ薄く且つ從來資本の不足の爲めに經營上頗る不利なる境遇に際會せしに拘はず而も尙多少の配當を繼續し來れり。今や同協會十週年に際し一大擴張の計劃あり、本社は一面に於て大日本文明協會刊行部として其將來に備ふる爲め相當資金の充實を必要とするのみならず更に此機會に於て組織を革新し定期以外有益なる圖書を刊行して社會の進歩に貢獻すると同時に大に業務の振興を謀らざるべからず。是れ本社が茲に案を具し増資を執行せんとする所以なり。若し夫れ本社増資後の成績に至りては最も健實なる方針の下に優に年壹割以上の株主配當を行ふを得べく大日本文明協會の隆盛と相俟ちて本社事業いよく發達すべきこと疑を容れざる所なりとす。

大正七年株式會社文明書院事業一覽

一大日本文明協會定期刊行書

- 第一期刊行書 五十卷 (絶版)
- 第二期刊行書 四十八卷
- 第三期刊行書 二十四卷
- 新會期刊行書 三十二卷 (大正七年八月迄三刊行セルモノ)

一臨時單行出版圖書

- 舊臨時刊行書 二卷 (株式組織前刊行ノモノニシテ今尙販賣シテアルモノ)
- 新臨時刊行書 三卷 (株式組織後ニ刊行セルモノ)
- 共同刊行書 二卷 (他ノ書肆ト共同出版ノモノニシテ別ニ印刷中ノモノ尙尠クアリ)

一歴史參考圖刊行會發行書

日本歴史圖録及解説 拾輯

一英語研究會發行書

英語註釋書 三卷
以上計 壹百七拾參卷

増資に依る事業豫算

一 增加資本金壹萬圓也	壹株金貳拾圓全額拂込五百株
總資本金貳萬圓也	此株數壹千株
一 壹ヶ年間收支豫算 (向フ貳ヶ年間ニ對スル分)	
一 金五萬參千五百拾六圓六拾錢	總 收 入
一 金貳萬參千七百五拾圓也	新會期會費收入
維持會費三十名分二千七百圓、特別會費百五十八名分二千四百圓、 通常會費八百名分壹萬〇四百圓、準會費五百名分八千貳百五十圓	
一 金六千圓也	二三期刊行書賣上金
一 金五千五百五拾圓也	歴史圖録賣上金
一 金壹萬七千九百七拾六圓六拾錢	臨時單行書出版收入
年新版十二種各九百二十部賣上代計金壹萬五千八百九十七圓 六十錢、再版參種各四百五十部賣上代計金二千〇七十九圓也	
一 金貳百四拾圓也	雜 收 入
一 金四萬八千九百七拾五圓也	總 支 出
一 金壹萬九千五百四拾五圓也	新會期刊行書出版費
特別製本各七百部出版費年五千七百拾貳圓也、通常製本各千三百部出版 費年八千貳百六拾八圓也、集集費集集費送費等計金五千五百六十五圓也	
一 金參千六百圓也	二三期刊行書出版費
一 金四千參百五拾圓也	歴史圖録出版費
一 金壹萬五千九百圓也	臨時單行書出版費
新版拾貳種各千部出版費計金壹萬四千四百圓也 再版參種各五百部出版費計金壹千五百圓也	
一 金五千五百八拾圓也	諸 經 費 一 切
差引殘金四千五百四拾壹圓六拾錢	固定資本償却
一 金壹千圓也	純 益 金
再差引殘金參千五百四拾壹圓六拾錢	壹ヶ年分純益金
一 金參千五百四拾壹圓六拾錢	積 立 金
一 金參百六拾圓也	役員賞與金
一 金七百圓也	株主配當金(年壹割)
一 金貳千四百圓也	後 期 繰 越 金
一 金八拾壹圓六拾錢	
以上	

東京市麴町區元園町壹丁目二十二番地

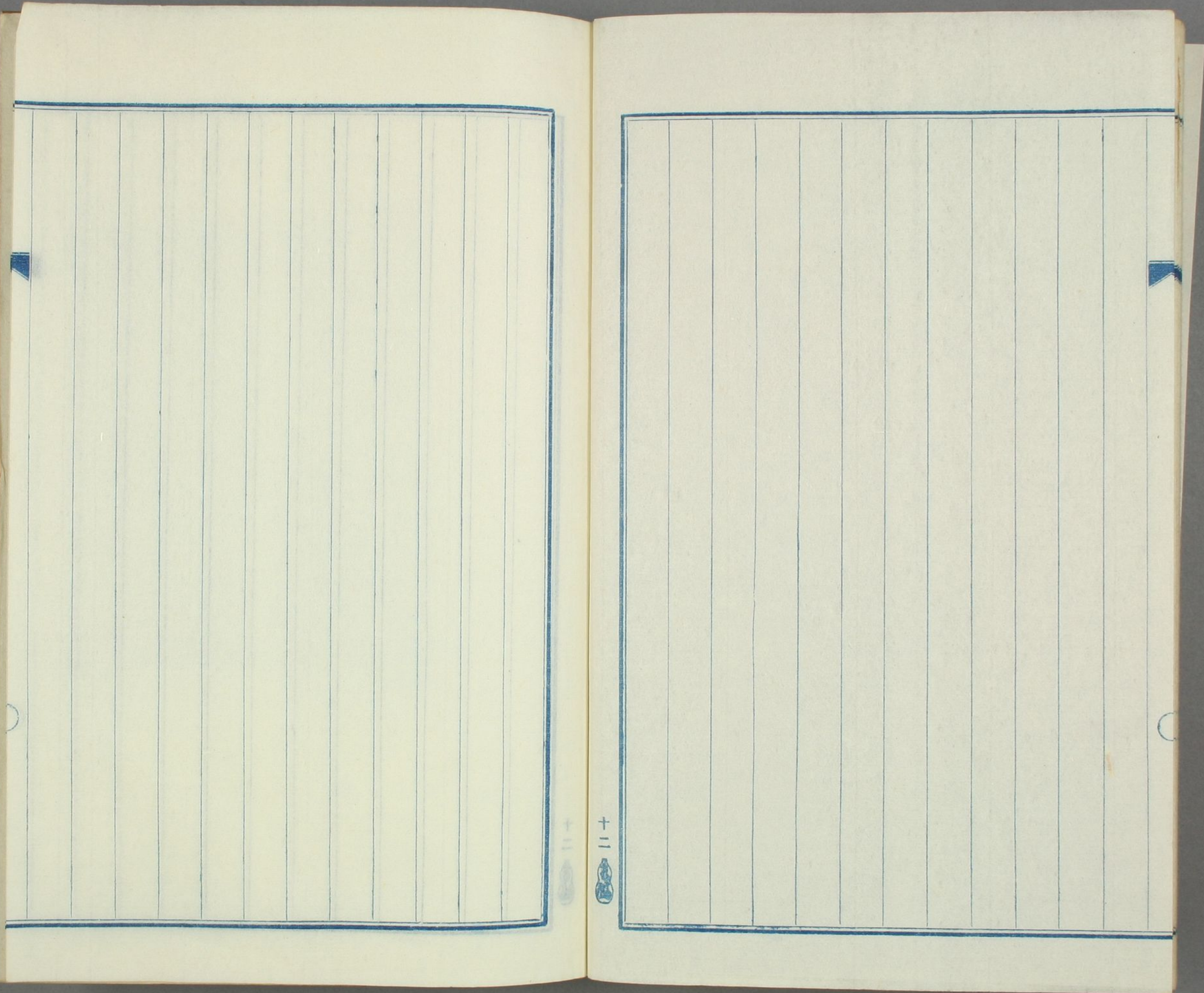
株式會社文明書院

附記す所の年清閑のなる日、各程應をいふも
合心の書法を寸法をいふ腰字鈔録をいふの書
三冊とありしもの鉛夏、瑣録と書ししものを寸
餘文庫といふ

○夏中の書物通う習をうへん田市中、出づるもの書
底に主字のふくむものあり、田田の書底を通う二
の書と稱す、^{寸法}又前後集、海峯を二冊、自本也、余
の寸法、筆寸ありしものと同敗るんも、海峯を
だけ、此方傳つるを以て、海峯の價二四、寸法と云
ふ不齊なるんも、いふことを得ざる也、外に佩文韻
海、物類選、海峯、必正本、極あり、任本也、此方、上集
に詩法を載す、抄本と改らし、うへんものこ

ハ稀なる、此外の書法を辨ふ、このも、初版也、市
河寛高の序、将谷松高の跋あり、九月、ホ、ホ

又識る、佩文韻海、物類選、文化九年、浪華、河内
尾の版、寸法、尾、為、法、相、を、附、し、又、法、人、劉、大、勳
王、通、注、一、新、し、め、を、河、内、河、保、一、表、也、を、附、刻
せり、此、を、オ、オ、三、と、以、下、版、式、同、し、こ、こ、推、め、ん
■、上、部、三、卷、の、版、有、る、もの、あり、後、寸、法、刻
し、る、もの、歟



樹風堂

十一



